秋月 奏は勇者でない

結城 颯

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

吾輩は讃州中学2年、秋月（あきづき）奏（かなで）である。名前はまだ無い（大嘘）。何故ボクが物語を担当するのか、頓（とん）と見当がつかぬ。何でも作者の思い付きで書き出した事だけは記憶している。

勇者部に所属しない、どこにでもいる普通の女の子の物語です。

基本1話完結の投稿ですが、作者のやりたい様に書いています。それでも読者が楽しんでいって貰える様に頑張ります

本編に関係する話には「★」を付けていますが、それだけ読んでれば大抵なんとかな

る

目次

オリキャラ紹介 ―――― 1
1．秋月　奏、始動ですっ！★ ―― 5
2．ネタには鮮度があります ―― 9
3．秋月　奏は新聞部所属である ―― 13
4．海岸掃除 ―――― 16
5．物置 ―――― 20
6．勇者部はうどんである ―― 29
7．日常をおくるもの★ ―― 33
8．美術部は奇人変人である ―― 39
9．帝もビックリ!!奏の爆発パワー！ ―― 42
10．煮干しを訪ねて　～好奇心は最高の唐揚げ弁当～★ ―― 53
エイプリルフール ―――― 61
11．黒〇閃 ―――― 67
12．燃えろ!!ボクの小宇宙（コ〇モ）!!【前編】 ―――― 73
13．特異点・冠位讃州中学校　UDON（ウドン）【後編】 ―――― 88
14．物書きの苦難、無き締切に追われる者 ―――― 100
15．料理教室 ―――― 115
16．ステネコ ―――― 123
MELTY　BL〇〇D　TYPE　A

SAHI★ ―― 134
17．讃州中学の風来坊 ―― 150
18．いのるもの★ ―― 156
19．だからこそ★ ―― 161

オリキャラ紹介

名前　秋月（あきづき）　奏（かなで）
性別　女
年齢　１４歳
身長　１５５ｃｍ
血液型　Ｏ型
誕生日　４月１８日
趣味　ゲーム、昼寝、もの作り、探索
好きな食べ物　うどん、フライドポテト、唐揚げ
所属　讃州中学校２年生　新聞部所属
モチーフ花　アルストロメリア
見た目
青みのかかった白髪で碧眼。腰まで伸びた1本結びの髪型をしている。
制服

制服（髪解きｖｅｒ）

私服

みーなのキャラメーカーさんで作ってみたのですが、ほぼイメージ通りでビックリしました。キャラメーカーすっごいです。

詳細

一人称は「ボク」。面白いこと楽しいことに目が無い活発な女の子。冒険家みたい所があるため、（ゲームやアニメから）変な知識を蓄えてきたり、見知らぬ土地に行ったりもする。

友奈と東郷とは小学生からのクラスメイトで、よく行動を共にしている。新聞部の取材のため、勇者部の活動に同行する事もある。

友奈とはテンションや波長がよく合い、「ユウちゃん」「かなちゃん」と呼びあっている。保護者（東郷）の監視下であれば、奏の変な遊びにも付き合ってくれる。めっちゃいい子。でも心配。

東郷にはよく世話になっており、たまに食事を作ってくれたりお菓子を貰ったりして

いるため、頭が上がらない。というか過去の経験（トラウマ）のせいで逆らえないのが正しい。怖い。

破天荒ではあるが根は真面目であり、意外にも無遅刻無欠席で、成績も良い方である（ただし寝坊回数は多い）。

自転車はあるのだが、悪路を走れる様にとか宿泊道具を乗せれるように等、色々改造しまくっているため学校側から許可が下りなかった。命名ハヤテ号。

本人の性格による取材度胸と内容の面白さから、新聞部の記事の1コーナーを任せられている。具体例を上げると「ばっちゃんの名にかけて」「秋月奏は見たっ！」「突撃！讃州中学の部活動！」。無論、メモ帳は常に持ち歩いている。

趣味のもの作りは多種多様。何かをつくるのが好きなので、ＤＩＹ、裁縫、デザインレイアウト、プラモデル作り等々と幅広くやっている。

家族から出された条件の下で一人暮らしをしているため、最低限の家事は出来るが、料理は出来るがコンビニやスーパーの弁当などの手抜きが多い。

現在の家族構成は奏、父、母、祖父、祖母。奏がよく「ばっちゃんが言ってた」と言うが、それは実の祖母ではなく、近所で知り合ったばっちゃんからの受け売りだ。よく将棋の相手をして負かされまくった。

冒険家というだけあり、足場が悪い所も平然と登るほど運動神経もいい。しかし、無

茶だけは禁物と、周囲から深く釘を刺されている。それも一人暮らしをする為の絶対条件でもあった。

1．秋月　奏、始動ですっ！★

雲ひとつない澄んだ青空に、照り返す太陽の輝き。まだ肌寒さを感じる気温だが、朝から快晴であるため気分がいい。何も無ければ、このまま3度寝に突入してもいいぐらいだ。

そんな事を思いながら、少女は通学路を全力で走っていた。

「お布団君め！ボクから全然離れないどころか、二度寝までさせるなんて――――――万死に値するっ！」

悪態を付きながらも、自己紹介は欠かしてはいけないって何処かのばっちゃんが言ってた気がする。

オッスおら秋月（あきづき）　奏（かなで）！どこにでもいる１４歳の中学2年生っ！絶賛予鈴が鳴るのが先か、ボクが教室に辿り着くのが先か、というデッドヒートを繰り広げている哀・戦士さ！

「さ、さす、がは……瞬足、の足を……も、持つ者……」

水から打ち上げられたかの様に、肩だけでなく全身で酸素を求め呼吸していた。目眩や平衡感覚が酷いが、デッドヒートは無事勝利を収めたのだった。

「かなちゃん、おはよー!……って、大丈夫？　」
「お、おっはよーユウちゃん……だ、だいふょーふだいふょーふ。オエッ……ごめん、やっぱ無理」
　苦しさの余り、椅子に座る事すら辛い。世界がグワングワンしてろくに見えないし、頭もキーンと鳴ってきてるし。絶対顔色も青ざめてる。もうやだぁ……お家帰るぅ。
「また寝坊したのね。だから早く寝なさいって注意してるのに」
「と、とーぎょーさん……これには……ウップ。ふきゃい……理由が、あるので、す……」
「1度深呼吸をして落ち着いたら？呂律が回ってなくて何を言ってるのか分からないわ」
　言われた通り、深呼吸して酸素を大量に肺に取り込み、一気に吐き出した。呼吸を整えるのは大事ってばっちゃんも言ってたけど、滅茶苦茶楽になる。
「東郷さん、これには深い訳があるんだ。学生としてやるべき事をやっていたら、いつの間にか時計の針は3時を指していたんだ。これには走れメ〇スもビックリ」
「急に元気になった!?　」
「それで、そのやるべき事とは？　」
「ポケ〇ンです」
「天誅っ！　」

どこから用意したのか、ハリセンが脳天を突き抜ける。小気味よい音が鳴り響くが、クラスメイトはいつもの事かとスルー。

「電子機器で遊んで夜更かしはいけません。女の子なんだから、肌にも健康にも悪いわよ」

「だってポッチャ○マがいい感じに強くなってきたんだもん!バッジもゲット出来て波に乗ってきたんだもん!やめられない止まらない、かっぱえ○せんだよ!　」

「この子ったら……1から精神を鍛え直す必要があるわね」

最後に小さく呟いた言葉はしっかりと耳に届き、今度は恐怖で顔色を悪くする。

「そ、それだけはっ!反省しておりますので、お許しくださいませ!東郷さんどうか、どうかお慈悲を――!」

過去に受けた経験(トラウマ)が蘇り、パワハラ会議に呼ばれた哀れな人物の如く懇願する。

「まあまあ東郷さん。かなちゃんも反省してるんだし、いいんじゃないかな?　」

「むぅ……友奈ちゃんがそう言うならいいけど、次は無いわよ?　」

天使からの助け舟により、お咎め無しですんだ。ありがとう友奈ちゃん。今度うどん奢るね。

「ありがとう、気をつけるよ。でもね東郷さん、ボクだってポケ○ンだけで寝坊しそうになった訳じゃないんだ」

「というと？　」
「お昼寝してたら夜眠れなくなっちゃった」
「自分から墓穴を掘りに行った!?　」
「天誅っ！　」
　再び教室に鳴り響いたハリセンの音は、チャイムの音と共に掻き消えていったのだった。

2．ネタには鮮度があります

『いいかい奏？男には守らなければならない約束ってものがあるんだよ』
「ばっちゃん、ボクは女の子なんだけど」
『だから、ばっちゃんと男の約束しておくれ』
「え、スルー？ゲ○スルーなの？」
『ちゃんとした飯を食うんだ、そんなんじゃ大きくなれんよ』
「急にお説教!?文脈がおかしいよ!?」
『奏――――最後に言わせておくれ』
「えぇ……どうしたの？」
『レモン1個に含まれるビタミンCは……レモン1個分だよ』
　そこで視界は急に暗転。意識が戻ると、見慣れた天井と、耳障りのベルの音が鳴り響いていた。
「夢にしては滅茶苦茶だよ……ばっちゃん」
　呆れながら目覚まし時計へと視線を向けると、時刻は7時半を指していた。やれやれだぜと溜息を吐き、目を擦って何回も見直すが、現実は非常。残酷に時を刻むだけだっ

た。

「2話連続で同じスタートとか、お話としてどうなのかなぁ!? 」

涙目になりながら着替えと支度を済ませ、躍動を感じながら走り出したのだ。その理由が、例えどんなにくだらなくても――――。

「それで、今日の原因はなんなのかしら? 」

「今回は違うんだよ東郷さん。ゲームをしていたとか昼寝をしていたとかじゃない。健全な理由。変な夢を見たせいで遅れたんだよ」

「寝坊の時点で健全じゃないと思うのだけど」

「へー、どんな夢だったの? 」

「よく聞いてくれたユウちゃんよ。それがカクカクシカジカ四角いムーヴで……」

説明をするも、首を傾げてハテナを浮かべている。分かるよその気持ち。ボクも何言ってるか分からないもの。

「それはまた奇妙な夢ね……」

「レモン1個に含まれるビタミンCって、レモン1個分だったの!? 」

「いや、実の所、それにはいくつかの説があるんだよ。ある説では5個分とも言われてるし、1個分とも言われてる。一概に何個分と言っていいか分からないんだ。ただ、食品業界の基準20mgから何個分って算出してるのは確かだよ」

「おおー、詳しいねかなちゃん！レモン博士だ！」
「ガオー、レモン博士だー！喰らえ、レモンビーム！」
「きゃー！目に染みるー！」
　腕を十字にしてウル○ラマンの光線みたいに叫ぶと、ユウちゃんは両目を抑える仕草をしながら東郷さんの後ろへと逃げていく。
　突然の遊びでも、こうして乗ってくれるユウちゃんだが、東郷さんはというと……。
「助けて、東郷さーん！」
「友奈ちゃん……ええ、任せて！檸檬（れもん）博士！貴様の悪逆もここまでだ！国の平和は、私が守るっ！」
　ユウちゃんが絡むと、結構乗ってくれる。しかもやるからには徹底的に。役者魂を――
――いや、国防魂を感じるよ。
「出たな国防の戦士！積年の恨み、ここで晴らさせてもらうぞ！喰らうがいい！レモンビーム！」
「なんの！牛乳防壁！」
「ダ、ダニィ!?ビームが通らないどころか、防壁で固まっていくだと!?」
　？α？波でも出そうな謎の動きで防がれ、驚愕する。
「甘いわね。牛乳に含まれる成分は、檸檬の成分を凝固するものが含まれているのよ！

反撃主砲、凝固弾、撃ぇーーーっ！」

「そ、そんな……ぶるぁぁぁぁぁっ！」

カルシウムとペクチンにより凝固した砲弾を喰らい、レモン博士は地に伏したのだった。

「国防、完了っ！」

「流石東郷さん！かっこいー！」

手を組み合い、２人はキャッキャッキャッキャッと微笑ましい光景を繰り広げていた。

制服に付いた埃を払いながら立ち上がり、その様子を見ていた奏は２人に抱き着く。一瞬困惑されるが、ユウちゃんもギューっと抱きつき返し、東郷さんも満更どころか満面の笑みを浮かべていた。

出来るなら、このまま楽しい時間が、ずっと続きますように。心の底からそう願いながら、強く抱き締めるのだった。

3．秋月　奏は新聞部所属である

「ユウちゃん、東郷さん。今週やる活動予定ってなにかな？　」
「ええっと……確か保育園の人形劇と、海岸の掃除があったよ」
「あとは子猫の飼い主探しね。これは変わらず難航ね」
　２人から聞いた活動予定に、ふむふむと頷く。どうするか数秒思案すると、矢木に電流が走るかの如くに閃く。
「じゃあ、海岸掃除の時に付いて行かせて貰ってもいい？　」
「それはいいけど、また取材？　」
「ＹＥＳＹＥＳＹＥＳ！代わりと言ってはなんだけど、掃除も手伝うし、こっちでも記事で子猫の引き取り手を探してみるよ」
　新聞部所属の奏は、学校新聞記事の１つのコーナーを任せられている。なので取材の一環として、色んな部活や人に突撃しているのである。なお、内容は意外にも好評。
「ありがとうかなちゃん！これで子猫達の飼い主が見つかるといいね！　」
「そうね。でもいいのかしら？確かに助かるけど、そんな私利私欲に記事を扱っても」
「無問題（モーマンタイ）！今回は『突撃！讃州中学の部活動！』で行くから！　」

親指を立てて言うと、ユウちゃんから「なんかどこかで聞いた事ある気がする名前だよね」と言われる。……君のような勘のいい女の子は好きだよ。

記事と予定が決まった所だが、勇者部部長の所へ取材許可を貰いに行く。勇者部メンツはいいよと答えてくれるが、それに甘えず確認はきちんとしなさいってばっちゃんも言ってた。

「頼もーーーっ!!」

3年の教室を扉を勢いよく開け、人目も気にせず叫ぶ。一瞬静寂が訪れるが、いつもの事かとすぐに賑やかな空気になる。

目的の人物を探すと、その人物は呆れた様子でこちらを見ていた。そんな当人の気持ちなど気にせず、奏は失礼しまーすと中に入る。

「風先輩、こんにちはー!」

「奏アンタね……いつも言ってるけど、普通に入ってきなさいよ」

「まあまあ風先輩。今に始まった事じゃありませんよ」

「なおさら直しなさいよ!あたしに向けられたものじゃなくても、なんか周囲からの視線が痛いのよ!」

「風先輩……これには深い理由があるんですよ」

「な、なによ……?」

真面目な声色で言うと、風先輩はゴクリと喉を鳴らし、神妙な顔つきをする。
「そっちの方が、面白いからっ！　」
「浅いわっ!!　」
立ち上がると同時に、ノートで頭にツッコミを入れられる。この手馴れた手つき……判断が早い！
「それは置いといて、今度勇者部の活動に付いていってもいいですか？新聞部の取材として」
「それはいいけど、毎度勝手にやって怒られないの？　」
「無問題（モーマンタイ）！基本自由にしていいと言われているので大丈夫です。それに、あとで報告はしますよ」
「変な所で真面目よねアンタ……」
「真面目に不真面目がボクなので」
「かいけつゾ○リか」
勇者部部長である風先輩から取材許可が下り、奏はすぐに教室を後にする。その後ろ姿を見送り、相変わらず嵐のような子ね、と風は呟いた。

4．海岸掃除

「それじゃあ樹ちゃん！掃除と飼い主探し、頑張っていこー！」
「はいっ、頑張りましょう友奈さん！」
海岸に来た友奈と樹は、ゴミ袋片手に砂浜に立つ。比較的綺麗だが、よく見ればチラホラと遠くまでゴミがあるのが確認出来る。
「二手に別れてやった方がいいですかね？」
「結構広いし、２人で一気にやってくのもありじゃない？」
「２人と言えば、奏さんも来ると聞いたのですが、姿が見えませんね」
「かなちゃん、なんか準備してから向かうって連絡があったよ。場所は伝えたからあとで来ると思う」
「準備って、また何か企んでそうですね……」
「フハハハハハハっ!!」
苦笑いを浮かべていると、声高らかな笑い声と、チリンチリンとベルの音が聞こえてくる。その方角へと視線を向けると、デカい荷物を背負った自転車が、猛スピードで近づいてきていた。

「もう大丈夫っ!!何故って？　」
　ブレーキターンの動作で自転車は止まり、スタンドをかけると同時に搭乗者が飛び降りる。
「ボクが来たっ!!!!　」
　砂浜に拳を打ち付けるように着地し、奏は大地に立つ。
「おおー！かなちゃんかっこいいー！　」
「相変わらず派手ですね、奏さん……」
「ありがとう2人共！そしてお待たせっ！秋月　奏、ここに見参っ！　」
　ビシッと決めたあと、奏は自転車を砂浜まで移動させ、リュックから長さバラバラの鉄の棒を取り出していく。
「どうするんですか、それ？　」
「よくぞ聞いてくれたいっちゃん！これと自転車（ハヤテ号）を組み合わせる事で、潮干狩りに使われる熊手（くまで）という役割を果たすようになるんだよ」
「果たすようになるとどうなるの？　」
「知らんのか。メンテが始まる」
　また詫び石ですか……といっちゃんは呆れた表情を浮かべている。風先輩と反応が似てるため、姉妹だなーと関心する。

「冗談は置いといて、これで砂浜を走っていくと、熊手にゴミだけが引っかかり、楽に集められるという算段だよ」
「かなちゃん、あったまいい――！　」
「発想もそうですが、よく用意出来ましたね」
「ハヤテ号は改造しまくってるから、色々アタッチメントを付けれるようしてあるんだ。熊手もその1つだよ。まあ、おかげで登校には使えないけどっ！　」
　散々走った苦い思い出を振り返るが、自業自得でもあるためそっと記憶に蓋をした。そうこうしている内に組み立て終わり、ハヤテ号熊手装備が出来上がる。
「行くよハヤテ号！さぁ、立ち塞がってみろ！我が戦車は星のように、容赦なくゴミ達を轢き潰す！　」
　口笛を吹き、ハヤテ号に乗る。そして前口上を述べながらペダルへと足をかけようとした瞬間、いっちゃんがあっ！と声を上げた。
「どうしたの樹ちゃん？　」
「いえあの……今気づいたんですけど、それってゴミだけじゃなくて、例えば砂の中にいる生き物や産卵した卵まで巻き込んじゃうんじゃないかな、と……」
「あっ」
　２人して間抜けな声を出し、顔を合わせる。沈黙が流れる中、奏はそっとハヤテ号か

ら降りる。
「今ボクがすべき事が分かった……ちょっと人理焼却してくる」
「そんなコンビニ感覚でいかないでください！　」
　姉譲りのツッコミにより、奏は大人しくゴミ袋を持ってみんなで掃除を始めた。記事のため活動風景の様子の写真も忘れず撮り、ハヤテ号には子猫の飼い主探しの文と写真が貼られた看板を立てたのであった。

5．物置

青い空。白い雲。そして輝く太陽。そんな絶好な天気日和の下、自宅の中庭で軍手を着けている、元気な白髪の少女は誰でしょう？

「そう、ボクです！」

「かなちゃーん。これ何処に置いとけばいいの？」

「あっ、そこに置いといてー」

ベランダから声をかけるユウちゃんは、同じく軍手を着けて段ボールを運んでいた。ホワイダニット。何故ユウちゃんが掃除をしているのか。単純明快。勇者部の活動で、中庭にある物置と家の中の物置部屋の整理整頓を手伝って貰っているのだ。

東郷さんも来ているのだが、車椅子では限界もあるのでユウちゃんのサポートをお願いしている。

「物置部屋、工具や部品や機械とかでいっぱいだね」

「もはや物置部屋でなく、工作室みたいになってたけどね。奏ちゃん、備品とかの細かいものを仕分けしておくけど、大丈夫？」

「お願いするよ。こっちも物置の整理が終わったら、そっちの方に行くから」

「ラジャー！かなちゃんも気をつけてね」
「ユウちゃんも東郷さんも気をつけてね。ノコギリとか刃物関係もあるから」
「本当に工作室みたいね……」
２人が物置部屋へと向かった所で、覚悟と気合いを入れる様に、手に拳を打ち付ける。
前回物置を開けた瞬間、地震か何かでバランスを崩していたのか、大量のガラクタが奏を呑み込んだのだ。もはや1種の魔境である。
「今回はヘルメットも被ったし、多分大丈夫なはず……安全防具、ヨシっ！」
某猫の指差呼称をし、いざ参らんと扉を勢いよく開ける。そう、勢いよく開けてしまったのだ。衝撃で揺れたガラクタは崩れ落ち、そのまま奏を呑み込んでいったのだった。
「ぎゃあああああああっ!!!」
よくよく考えたら、ヘルメットの意味を成さない事に呑み込まれながら気づく。いったい何を見てヨシって言ったんですか!?
「凄い音と声が聞こえたけど、かなちゃん大丈夫っ!?」
「こ、これは……！さながら雪崩に呑まれた遭難者ね」
駆けつけてきた２人は、あまりの惨状に驚愕する。奏はガラクタの下敷きになり、辛うじて頭と両腕が出ている状態だった。

「待っててかなちゃん！今助けるからっ！　」
「私は救急箱を取ってくるわ。気をつけてね友奈ちゃん」
「お、お願いぃ……」
　ガラクタの重さでまともに身動きが取れず、涙目になりながら救助を懇願する。
「まずはこれをどかさないとね。かなちゃん、ちょっと時間がかかるけど、もう少しの辛抱だからね」
「ありがとうぅ……ユウちゃんも気をつけてね」
　二次災害にならないように、上から少しずつ運んでいく。戻ってきた東郷さんも加勢しようとしたが、車椅子だと危ないから私がやるよと、ユウちゃん1人で受け持つ事になった。
「それにしても、見た事あるものや変わった物があるわね」
「何かの像にコケシ、大量の鉄パイプや、美術の授業で見た気がする絨毯とかもあったよー」
「親から物置に置いてと頼まれた物や失敗作とか置いてるんだけど、中に何があるかはボクも把握してないんだ」
「だから整理整頓を手伝って欲しいって言ってたんだ。重たい物を運ぶなら私にお任せあれっ、だよ！　」

「でも、既にボクの救助で運んで貰ってるけどねー」
　何気なく会話をしているが、奏は未だ下敷きで、ユウちゃんは運搬作業をし続けている。その事に対し、確かにーと2人は声に出して笑う。
「笑ってる場合じゃないわよ。何故こうなったのか、あとで説明して貰うからね？　」
「はい」
　それから暫くして身動きが取れるようになり、ガラクタの山から抜け出す。身体の軽さと自由に動ける喜びに、頭上に両手を掲げる。
「日本人よっ!!ボクは帰ってきたっ!!　」
「反逆でもするのかしら……」
「それよりかなちゃん、怪我とか大丈夫？　」
「大丈夫!そしてありがとう、心の友よっ!!　」
「どういたしまして！　」
　ボケをスルーされたのか伝わってないのか分からないが、ユウちゃんも親愛のハグをする。背中から悪寒と怖い視線を感じたので、すぐに離れたけど。
「それで奏ちゃん。いったいどうしてこうなったのかしら？　」
「……カクカクシカジカ四角いムーヴでして」
　震え声で返事をして説明をすると、呆れた様に大きな溜め息を吐かれる。

「魔境というのはこの惨状で見て分かるけど、奏ちゃんは少し落ち着いて行動したら？また今回みたいに怪我をするわよ？　」
「はーい。でも、運良く今回も怪我してないよ？」
「あらそう？　」
　意味深な笑みを浮かべて指を鳴らすと、ユウちゃんが失礼と体をまさぐってくる。
「えっ、ひゃあ!?ちょっユウちゃん!?まさか、乱暴するつもり!?漫画みたいに！漫画みた――――痛っ！　」
　抵抗していると、脚の至る所から痛みを感じる。さっきまでは気にしなかったのだが、意識し始めた途端、どんどん痛みが増してくる。アドレナリン分泌って凄い。
「隊長っ！脚に痣が出来ておりますっ！　」
「やはりね。では怪我人を至急リビングへ運ぶべし！　」
「ラジャー！　」
　おんぶではなくお姫様抱っこで持ち上げられ、驚きのあまり硬直する。
「大丈夫。あとは私達に任せて、ゆっくり休んでてね」
「やだ……優しかっこいい……」
　リビングの椅子に座らされ、冷却材で痣になっている所を冷やす。絶対安静にしなさいと釘を刺され、東郷さんは物置部屋。ユウちゃんは物置への分かれて作業する事に

なった。

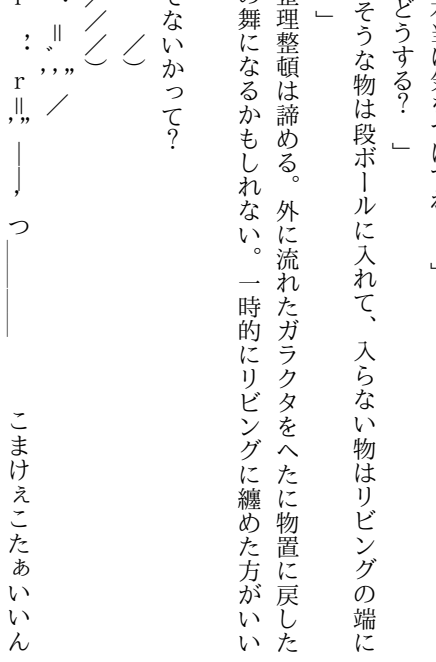
「ユウちゃん。怪我だけは本当に気をつけてね？」

「うん、分かったよ！でもどうする？」

「ひとまず段ボールに入りそうな物は段ボールに入れて、入らない物はリビングの端に置いてもらってもいい？」

怪我をした為、物置の整理整頓は諦める。外に流れたガラクタをへたに物置に戻したら、次の時に、今回の二の舞になるかもしれない。一時的にリビングに纏めた方がいいだろう。

既に二の舞で怪我をしてないかって？



,イ「ト、 ,!,!_ _r__ _
/ iトヾヽ_/イ”/ 、l、, /

「えっほ、えっほ」
纏めた段ボールや大きい荷物を運搬しているユウちゃんを見守っていると、流石に何か出来る事はないかと考える。
加勢すると東郷さんの雷が落ちるし、かと言って東郷さんの所に行くと、ユウちゃん1人だと分からない物もいっぱいあるし……。
「そうだ、アレがあった！ユウちゃん！動きっぱなしだし、戻って来るまで休憩してて！」
「えっ!?かなちゃん!?」
部屋の奥へと消えた奏に、困惑しながらも作業の手を止める。今度はユウちゃんがどうしようかなと、温かいお日様で日向ぼっこをしていると、家の中から甘い匂いがしてきた。
「いい匂い……」
空腹感を感じ、匂いに釣られて台所へと向かう。そこにはエプロン姿の奏が料理をしていた。

「わあ！パンケーキだっ！　」
「何か匂いがすると思ったら、洋菓子を焼いていたのね」
「よく来たね２人共。お昼もまだだったし、疲労には甘い物！秋月　奏特製のパンケーキをご馳走するよっ！　」
「わーい！じゃあ手を洗ってくるねー！　」
「絶対安静と言ったのに……でも、お言葉に甘えるわ。手伝いとかいる？　」
「大丈夫！東郷さんも手を洗ってきていいよ。もうすぐ出来上がるから」
「了解。じゃあ行ってくるわ」
　２人が手を洗いに行ってる間にパンケーキを焼き終え、チョコにマヨネーズに蜂蜜、餡子に生クリームにバターに苺とかを用意する。アイスは溶ける為、直前まで冷凍庫に入れたままだ。
「結城　友奈、東郷さんと共に戻ってきましたー！　」
「本当にすぐに焼き終わってるわね。ところで、なんでマヨネーズ？　」
「意外といけるんだよね」
「戻してきなさい」
「はーい。あっ、アイスいるー？　」
「いるー！　」

マヨネーズと入れ替わるようにアイスを運び、食卓に座る。

「それじゃあ、全ての食材に感謝を込めて――――」

「「いただきます」」

合掌し、食事につく。食べ終えたあとは洗い物を済まし、作業の再開をするのだった。

6．勇者部はうどんである

「秋月　奏っ！ここに復活（リ・ボーン）っ！　」

早朝学校にて、扉を勢いよく開けて教室に入る。寝坊しなければ来るのは早いのだ。寝坊しなければ。

「おはよう奏ちゃん。朝から元気ね」

「おっはよー。脚はもう大丈夫なの？　」

「おはよー。おかげさまで痛みは引いたよ。そっちも、保育園の人形劇はどうだった？　」

「大成功だったよ！子供達も喜んでくれたし、大盛り上がりっ！　」

「友奈ちゃんのアドリブもよかったわ。園児達も喜んでくれたもの」

「アドリブかー……でも、楽しそうで良かったよ」

アドリブに翻弄される風先輩の姿を想像し、心の中でお疲れ様ですと合掌する。何故かホント大変だったわよと返答が返ってきた気がした。

「うん、楽しかったよ」

「そうね。次も成功させなきゃ」

「その時はボクも見学に行こうかなー。どんな内容か気になるし」
新聞部の記事作りも落ち着いた所だが、またネタ集めをしなければならない。そういう意味では、勇者部は面白い事ばかりでユニークな人達の集まりだ。見ても聞いても飽きはしない。
いや、奇人と変人が巣窟する美術部もいいなと考えていると、始業のチャイムが鳴る。結局予定が決まる事は無く、そのまま平穏な1日を過ごすのだった。
そして放課後。やる事も思いつかなかったので、新聞部の部室の前に訪れる。
「待ちに待った時が来たのだ！多くの英霊が無駄死にで無かったことの証の為に……再びジ〇ンの理想を掲げる為に！星の屑成就のために！ソロモンよっ!!ボクは帰ってきたっ!!!」
前口上を言いながら、いつものように扉を勢いよく開ける。しかし、扉がぶつかる音は聞こえず、代わりにちょうど1人分入れるぐらいの隙間で扉は止まる。
「甘いよかなやーん。せめてソロモンの所から始めるべきや」
「部長、ツッコむ所が違うっす」
「くっ！ではテイク2をやってきますね！」
「やんなくていいっすよ」
新聞部部長と副部長に招かれ、部室へと入る。何かの集計をしてたのか、机の上には

山ほどのプリントが置かれていた。
「この前配られたアンケートのやつですね。手伝いますよ」
「ありがとうねー。かなやんも記事の方はどう？　」
「ほぼほぼ終わった所です。今回は勇者部関連ですよ」
「風やんの所はおもろいし、かなやんの記事も良く出来てるからなー。期待してるで」
「えへへー。でも部長達には敵いませんよー」
　だってこのアンケート。内容が「勇者部といえば？」で、回答がうどん、うどん、女子力、うどん、ボランティア、うどん。うどんばっかりだもん。
「勇者部といえば、うどんみたいな所があるからなぁ」
「もはやうどん部でいいんじゃないっすか？　」
「部長！副部長！うどんが食べたくなってきましたっ！」
　うどんの話題ばかりで、お腹が空いてきた。仕方ないよ、香川県民だもん。みんなそうだもん。
「ほなさっさと片付けて、うどんでも食べに行くかー。奢ったるわ」
「わーい！部長大好きー！　」
「ゴチになりまーす！　」
「現金やなぁ君ら……」

集計はほぼ9割がうどんという、驚異の結果を出して終了した。勇者部から何か言われそうだが、間違ってはない。間違ってはないから、ボクは何も考えず、部長に奢ってもらったうどんを啜ったのだった。

7．日常をおくるもの★

それは、唐突に起きた事だった。授業中にユウちゃんと東郷さんのスマホが鳴り、先生に注意されている時だ。

珍しいなーと思いながら笑っていると、神隠しに会ったかのように、２人の姿が消えたのだ。

突然の事でみんなざわめき、先生も狼狽えてる様子。ボクも例に漏れず、思わず席から立ち上がる。

２人はどこに消えたのか？何故あの２人なのか？様々な疑問が思い浮かぶが、まずは探さないといけない。

どこを？いや、とにかく当てずっぽうでもいい。そう思い教室を出ようとすると、誰かにぶつかり、尻もちをつく。誰だと顔を上げると、見た事のあるマークが目に入る。

「大、赦……」

神樹様を奉っている、四国最大の組織。その神官が、目の前に立っていた。

「事情を説明します。皆様、お静かに願います」

こちらを気にしてないような、無機質な声。それどころではない為イラつきを感じる

が、何かを知っている様子なら話は早い。大人しく席に戻り、神官の話を聞く。
神樹様のお役目。それに、ユウちゃんと東郷さん、勇者部のメンバーが選ばれたようだ。それは大切なお役目であり、大変名誉な事だと言われた。
だが、肝心のお役目の内容については、語られる事はなかった。質問を投げかける者もいたが、具体的に語る事も、聞く事も出来ないそうだ。無論、勇者部からもらしい。
ただ、今の奏は、それよりも聞きたい事がある。
「ユウちゃんや東郷さん、勇者部のみんなは無事なんですか?今、どこにいるんですか?」
「無事のようです。学校内にいますので、後ほど戻ってくるでしょう」
神官の言葉に、よかったと安堵のため息を吐く。
「説明は以上です。これにて失礼します」
神官が退出すると同時に、終業のチャイムが鳴り響く。戻ってきたユウちゃんと東郷さんは、クラスメイトから話を聞かれるが、神官の言った通り、秘密のため話す事は出来ないそうだ。
その中、東郷さんの表情が少しだけ暗いことに気づく。多分、いやきっと。お役目で何かあったんだ。どうしたか、大丈夫か聞きたいが、お役目絡みだから真面目な東郷さんは、ボクにも話さないだろう。なら。

「ユウちゃん。ちょっといい？　」
　人混みや東郷さんから少し離れた所に、ユウちゃんを手招きする。
「なに、かなちゃん？　」
「あのね。お役目については、やっぱり話せないのかな？　」
「あー、うん……ごめんね。風先輩にも口止めされてるんだ」
「そっか……でもいいよ。いつか話せる時が、話してもいいと思った時が来たら、話して」
「うん。その時は、私達の活躍を聞かせてあげるね！　」
「楽しみにしてるよ。それと、東郷さんの事なんだけど……任せてもいいかな？　」
　奏の言葉に、ユウちゃんは一瞬キョトンとする。だが、すぐに何の事か察したのか、強く頷いてきた。
「怖い事や、辛い事、苦しい事があるかもしれない。お役目に関しては、ボクは何にも力になれないかもしれない。だから、ユウちゃんが東郷さんを支えてあげて」
「……うん、任せて。大丈夫、東郷さんは、私が守るから。かなちゃんの気持ちと一緒にね」
「ありがとう。でも、ユウちゃんも弱音を吐いてもいいんだからね。ボクにも、それを聞く事ぐらいは出来るから。だから、1人であまり抱えないでね」

「それは大丈夫！勇者部五箇条、悩んだら相談があるからね！」

勇者部五箇条。勇者部で作ったモットーみたいなものだ。初めて聞いた時は、少しふわふわした内容。けど、なんか勇者部らしいなと笑った。

「それでも、無理しないでね」

「ありがとうね、かなちゃん」

これで話は終わりと告げるように、ぐーっと身体を伸ばす。東郷さんの元に戻るユウちゃんの後ろ姿を、それでも心配そうに見つめる。

誰かの為にいつも頑張り過ぎる、友達の背中を。

翌日。東郷さんの様子は昨日変わらず、どこか浮かない様子だ。表面上は取り繕っているが、お役目について悩んでいるのだろう。

「ユウちゃん、東郷さん！大変だ！大変な事になったよっ！」

「どうしたのかなちゃん!?」

「いったい何があったの？　」
　しかし、奏は普段通りに行動する。だって、ボクに出来るのは応援と心配。そして、いつもの日常を送って貰う事だけだから。
「あ、ありのまま昨日起こった事を話すぜ！
　紙パックのプリンを器に移して湯煎して溶かそうとしたら、いつの間にかプリンが半分無くなっていたんだ！
　な、何を言っているのか分からないと思うが、ボクも何が起きたのか分からなかった……頭がどうにかなりそうだった……。
　湯煎で溶けて無くなったとか、零したとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……」
「は、半分もプリンが無くなっていたの!?　」
「もしかして、つまみ食いとかして無くなったんじゃないの？　」
「片鱗を味わっただけに？　」
　言った瞬間、ハリセンが脳天を突き抜けていった。腕が上がったのか、段々反応速度が上がってないかな？
「いやいや東郷さん。プリン溶けたかなーと、スプーンで掬ってちょくちょく確認してただけだよ。そしたら半分も無くなっていたとは、これにはポル〇レフもビックリ仰天

ニュース」
「完全に自業自得じゃないの……つまみ食いはいけません」
「はーい。と言うわけで、２人の分のプリンを作ってきたので、デザートに食べよー！」
「わーい！かなちゃんありがとうー！」
「全くもう……でも、ありがとう奏ちゃん」
漸く笑った東郷さんに、奏はよかったと笑みを浮かべる。どうか、これからも笑っていけるようにと、切に願う。

8．美術部は奇人変人である

放課後。勇者部は昨日の事についてミーティングがある為、奏は何処に行こうかなとさまよっていた。

「ん？」

美術部の部室が目に入り、足を止める。入口の外観がいつもと違く、部屋の中が暗いからだ。好奇心で扉まで行くと、近くの机の上に同意書が置かれていた。

内容は、簡潔に言えば何があっても自己責任で、こちらは責任を負えないというものだ。いったい何をやっているんだ美術部はと呆れながらも、同意書に嬉々として記入する。

「我が名は秋月　奏っ！2年3組より同意書に記入しこの地へ来たっ！そなたたちは美術部に住むと聞く、奇人変人かっ!?」

いつもの様に扉を勢いよく開けると、思った通り中は薄暗く、ホラー要素満載。完全にお化け屋敷と化していた。

「よくあるクラスの出し物みたいな感じかな？とりあえず進んでみよ」

そう思って前に踏み出した瞬間、地面に足が沈み、バランスを崩す。一瞬落ちていく

感覚になり、肝が冷える。足元を確認すると、どうやら床にスポンジを敷いていたらしい。

前の方もよく見ると同じく仕掛けがあり、気をつけて進まないと行けないようだ。抜け出してまた1歩前に進むと、今度は顔面にヌルっとした物がぶつかり、うひゃっと声を上げる。

「今度は上から濡れたスポンジ……だと……!?見事な視線誘導(ミスディレクション)なり……」

どうやら、頭上と足元に注意しながら進まなければならない。また前に足を踏み出すと、今度は左右から手が飛び出し、驚きのあまり尻もちをつく。

「これ、風先輩だったらガチ泣きするやつだよ……」

そしてことごとく引っ掛かっている奏に、美術部員はさぞ喜んでいるだろう。既に帰りたい気持ちが芽生えてきている。

突き当たりまで進むと、目の前の扉に入るか、曲がって進むかの道に別れた。ただ、扉にはリタイア用と記されており、途中棄権が出来るようだ。

「進むなら今度ユウちゃん達を連れてからにしようかな。うんそうしよう。1人より2人、2人より3人。オールフォーワン、ワンフォーオール」

理由をでっち上げたところで、奏はリタイア用の扉を開けた。開けた先は、死屍累々の屍に囲まれながら、笑顔を浮かべている美術部部長が居た。

安心しきった瞬間に地獄に落とされたようなもので、流石の奏も、恐怖のあまり全力で叫んだのだった。

のちに、奏を保護した美術部部長はこう語った。

恐怖というものには鮮度があります。怯えれば怯えるほどに、感情とは死んでいくものなのです。

真の意味での恐怖とは、静的な状態ではなく変化の動態。希望から絶望へと切り替わる、その瞬間のことを言う。如何でしたか？瑞々しく新鮮な恐怖の味は……と。

奏は答えた。エク〇カリバーで焼き払いたくなったと。かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと。

9．帝もビックリ!!奏の爆発パワー！

「かな、ちょっといいか？」
「ん？おお、その声はもしや、我が友李徴ではないか」
「だーれが虎だ」
　手に持ってるノートを頭に置いてきた男は望月（もちづき）　帝（みかど）。小学生からの友達で、よく奏の行動に振り回されてきた保護者的人物だ。
　その為か奏の両親とも仲が良く、無茶をしたら家族に連絡（みつこく）されるようになっている。解せぬ。
「それでは、虎を屏風（びょうぶ）から追い出してください。すぐに縛ってご覧にいれます」
「虎のくだりはいいんだっつーの」
「おおぅ、押しつけないでよ」
　ノートを顔に押し付けるように渡され、後退りながらも手に取って見ると、奏の使っていたノートだった。
「そういえばミカに貸してたっけ？忘れてた忘れてた」
「それで俺より成績良いのが腹立つわ……とりあえず、ノートサンキューな」

「うむ、良きにはからえ」
「何様だよ」
「殿様じゃ、ほっほっほっ」
「3回死んで2回生き返れ」
「それ1回足りなくないっ!?　」
「うっせい。それと、あー……」
　歯切れが悪く、どこか気が向かないかのように顔を逸らす。その様子に首を傾げ、どうしたの?と聞くと、帝は頭を掻きながら目線を合わせる。
「……親御さんから伝言。気が向いたらでいいから、顔を見せに来いだとさ」
　告げられた言葉に、一瞬息を呑んで固まる。何故帝が言いにくそうにしていたのかを察し、自分でも困ったような笑みを浮かべているのが分かった。
「うん……気が向いたら、ね」
　煮え切らない返事をすると、帝はそっかと言うだけだった。さっきとは違い、気まずい空気が流れる。すると、帝は奏の頭に手を置き、おもむろに髪をクシャクシャにしてきた。
「ちょっ!?なにするのっ!?　」
「いや、何となく。うっわ、酷い髪型になってるぞ」

「ミカがしたんだよっ!?あーもうめちゃくちゃだよ！ユウちゃんか東郷さんにクシ借りてこよー！　」
「うっせい。行くならさっさと行ってこい」
「なんだよもうー！バーカバーカ！　」
「悪口のレパートリーが幼稚すぎだろ」
　手で行った行ったと振り払うと、奏はぶつくさ言いながら2人の元へと向かった。帝はその背中を見送り、目を細めて小さく呟く。
「……辛気臭い顔なんて、お前には似合わないんだよバーカ」

　昼休み。ユウちゃんと東郷さんは勇者部の活動でいないため、久しぶりに1人の時間となった。流石に教室でぼっち飯は寂しいと思い、同じくぼっち飯をしていたミカの所へと襲撃する。
「へい大将、やってる？　」

「居酒屋か」
「まあまあ。お互いぼっち飯だし、たまには一緒にどう？　」
「いや、俺はソシャゲのスタミナ消費しながら食うから1人なだけだからな？　」
「うっわお行儀悪っ」
「うっせい」
　などと言いつつ、机のスペースを空けてくれる。このツンデレめと思いながらも口にせず、前の席の人から許可を貰い、椅子に座る。
「ところでミカよ」
「食べながら喋るのも行儀悪くね？　」
「細かい事はいいんだよ。それより、今回は追加キャラであるミカの話なんだけど、本人的にはどう思う？　」
「そうだな。まずメタ発言をやめろと思う」
「ボク的には『もはや原作関係無くない？』と思ったけど、そこを突っ込むのは野暮だと考え直したんだよね。そもそも予定してたし」
「話を広げなくていいからな？　」
「確かに急な登場な上に、久しぶりの更新。ついてこれる人も限られてくる。ただボクは言いたい。やったんですよ、必死に。その結果がこれな――あいたぁ！　」

「それ以上は言わせねーよ」

デコピンにより台詞を遮られ、額を擦りながらミカのスマホへと視線を向ける。ゲームのガチャ画面が表情されており、そこから操作しようとしていない。引くかどうか悩んでるといったところだろう。

だから、奏は11連ガチャの項目を連続タップしたのだった。

「ちょおまっ、かな、おまっ！何してんだぁ!!? 」

「引かないで後悔するより、引いて後悔した方がいい！でも1番は、引いて後悔しない事だ!!だからボクは引いたっ!! 」

「このっ、おまっ、バーロー！それはお前のデータでやれ!!俺の2ヶ月分の石返せ！返せよっ!! 」

「ひひやっ！ひぇんかいだ！おふねっ!!」

胸ぐらを掴んで揺らしてくるため呂律が回らず、帝は急な出来事に語彙力が飛んでいる。そんな状況でも、無情にガチャは回っていく。

「はれ？ふぁんまふぁんま。にゃんかにふぃかてぇんひてない？ 」

「マジでっ!!? 」

手を離され、2人して画面に食い入るように見届ける。演出が終わり、引いたキャラはビックアップされているものだった。その結果に信じられないという表情の帝に対

し、凄いドヤ顔を見せつける。
「ふっふっふっ……さあ、褒めたまえ。称えたまえ。感謝に涙したまえ。これが施しの英雄である、秋月　奏の力である」
「これで爆死だったら全力でプララヤってたけど、特別免除してやる。むしろ感謝しろ」
「なんでさ!?せっかく当てたのに!?　」
「お前自分のデータで爆死しまくってんの知ってんだからなっ!?そんな運が悪い奴に引かせたくないわ!　」
「言ったな!?運ゲー最弱と自負してるけど、言ってはいけない事を言ったなっ!?よろしい、ならばクリークだ!　」
「情勢的に使いづらいネタはやめろ」
　ごもっともな意見に、流石に使うネタを間違えたと反省する。すまんかった。
「コホン。それより、何で勝負する?今度の小テストとか?　」
「それお前の得意教科だからやらんわ。そうだな……」
　考える素振りをしつつ、帝はこちらを見つめてくる。そして何か閃いたのか、口の端を僅かに釣り上げた。あっ、見たら分かるぅ!これ絶対馬鹿な事考えてるやつや!
　帝からの提案を聞き、その内容に呆れながらも承諾した。時間は放課後、場所は公園で行うことになった。

「それで今一度聞くけど、何でボク達は大量のお手玉を持ってるの？　」
「勝負内容に使うからだろ？　」
　ルールは実にシンプル。投げる側と避ける側に分かれ、お手玉を相手に当てた数を競うだけのものだ。お手玉なのは当たっても比較的痛くないためだ。
「何でそんなドラゴン〇ールの修行みたいな内容にしたの？　」
「俺の反射神経も鍛えられるしで一石二鳥だから」
　家庭部所属である帝の言葉に、スーッと目を閉じる。絶対鍛える必要ないよね？跳ね返った油でも避けるの？やっぱり馬鹿だ。まともっぽいけど、やっぱり馬鹿だ。
「おい、今馬鹿にしただろ？　」
「してないでーす。それよりも、ボクが勝ったらご飯作ってよ。材料費そっち持ちで」
「唐突だな。なら罰ゲーム有りでやるか。俺が負けたらお前に飯を作る。勝ったら……まあ、思いついたら言うわ」
「よし、タダ飯ゲットだぜっ！　」
「既に勝った気でいやがるコイツ……」
　勝負開始（デュエルスタート）。まずは奏が投げる側、帝が避ける側だ。女子だからという事で近くから投げてもいいと言われたのだが……。
「本当にこの距離でいいの？流石に近くない？　」

「大丈夫だ。いいから思いっきり投げてこい」
「試しに1つ投げるけど、考え直してもいいから、ねっ！　」
　そう言って全力で投げると、放たれたお手玉は帝の眼前まで迫る。予想外の速度だったのか驚愕の表情を浮かべるも、紙一重で避けられてしまう。
「……ちょっとタンマ。やっぱりもう少し離れてやってくれ」
「悟飯ちゃん大丈夫だべ？　」
「誰が悟飯だ。いや悟飯みたいになりたいけどさ」
「ミカじゃ無理だと思うよ」
「うっせい」
　距離を離し、仕切り直しする。流石に男の子というだけあるのか、連続で投げたり纏めて投げたりしても、同じく紙一重で避けられまくってしまう。
　このままでは勝てる可能性は低い。そう感じ、投げる手を1度止める。
「かな？どうしたんだ？　」
「……ねえミカ。ボクも悟飯のようになっていいかな？」
「は？　」
「ボクも、悟飯みたいに金髪になりたいんだよ」
「はっはっはっ。なってもいいけど、そいつはかなにはちょっとまだ無理……って、言

わせんなバーロー」
「ノリツッコミありがとうからのじゃんけん死ねぇっ!! 」
「不意打ちフラガ〇ックは卑怯だろうがっ!! 」
全てのお手玉を同時に投げ切り、無事数発のヒットを確保した。ありがとう悟飯。ありがとうバ〇ットさん。
感謝の意を込めてガッツポーズを取り、攻守を交替する。
「もはや勝ったも当然ですね。風呂行ってくる」
「……」
「スルーは悲しいからつっこんでくれない? 」
嘆きの言葉は届いてないようで、帝は何か作戦でも考えてるのか、お手玉をじっと見つめていた。
「ミカ?どうしたの?いくら悩んでも、W(ホワイト)ボールは投げれないと思うよ? 」
「もし投げられたら野球の道に進んでるわ。それより、とっとと始めよう」
「よしきた。さあ、どんと来なさい!」
「ああ。それと、俺が勝ったらデートするって事でよろしく」
「……ふえっ? 」
告げれた内容に、情けない声を出して固まる。理解が追いついておらず、追いついた

所で、動揺のあまり顔が熱くなり、あたふたと慌てふためく。
「じゃあスタートで」
「えっ、あっ、ちょっ、待っ、ぎゃあああっ!!」
当然その隙を逃す訳もなく、大量のお手玉が襲ってくる。回避する余裕もなく、結果は帝の勝利となった。
「ノ、ノーカンノーカン!この勝負は未確定!成立していないっ!不成立っ!ノーカウントっ!ノーカウントっ!ノーカウントなんだぁー!」
「それ結局破滅してね?」
「だ、だって!始める前に相手の動揺させるのは卑怯じゃない!?」
「お前が言えた義理じゃないだろ。それに、俺は勝った際の内容を言っただけだし」
「だ、だとしても。デ、デデデ、デートって……」
気恥しさに呂律が回っておらず、視線も泳ぎまくっている。いやでも、急に言われたら動揺するって。誰だってビックリするって。
「それはまあ冗談として、詳しく言うなら飯作ってやるから買い物に付き合え、半額負担しろって事だ」
「……ボクが動揺した姿を見て楽しかったかーーっ!?」
「いやー、面白いもん見れたわ」

お手玉をひたすら帝に投げつけるも、荷物入れとして持ってきたダンボールで片付けついでに防がれる。
「満足したか？それで、何かリクエストあるか？　」
「……じゃあ唐揚げ」
「あいよ。唐揚げメインとなると、他に何作るかなー……」
献立を考えながら、むくれつつも片付けをしている奏を横目で見る。
「状況的に、あながち間違ってもないんだけどな」
その手の耐性が０の幼なじみに、小さく溜め息を吐く。片付けを終え、２人で買い物を済ませたあとは、家で唐揚げを沢山揚げたのだった。

１０．煮干しを訪ねて　～好奇心は最高の唐揚げ弁当～★

「えーっと、あと買う物は」

買い物メモとカゴの中を交互に確認し、スーパーを散策する。生活用品や消耗品が無くなってきたので、こうして買い出しに来ている。

「これでメモのやつは大丈夫っと。あと必要な物は無かった様な気がするし、こんなものかな？」

レジに向かおうとすると、弁当コーナーが視界に入る。そういえば、今日のご飯をどうするか決めてなかったっけ。

「夕飯に弁当はありだと思いませんか？思いますよね？そう、思うんですよ。なので弁当にしようと思います。唐揚げ弁当が残ってるといいなー！」

誰かに言い聞かせるように、ため〇ならない論法を活用して早足で弁当コーナーへと向かう。

夕方という時間帯は、ほとんど弁当が残ってはいない。しかし、神は言っている。ここで死ぬ運命じゃあないと。目的の唐揚げ弁当が、残っているじゃあないかと。

嬉々として唐揚げ弁当に手を伸ばすと、隣からも別の手が伸びてくる。
「あっ」
「あっ」
お互い間抜けな声を出しながら、ツインテの女の子と顔を見合う。
「えっと、どうぞ」
「えっと、どうぞ」
1字1句同じ発言をし、沈黙が流れる。日本人特有の、そして変な所で発揮される譲り合いの精神。
「ボクはいいから、良かったらどうぞ」
「いいわよ。アンタが買っていきなさい」
「いいよいいよ。家に帰ったらパンあるから」
「ドヤ顔で何を言ってるのよ。なおさら食べなさいよ。私は別のやつを買うから」
そう言って唐揚げ弁当をこちらへ移動させ、女の子は別の弁当を手に取る。
「えっと、ありが……って、もう行っちゃった。なんだかカッコイイ感じの女の子だったなぁ」
買い物カゴは、煮干しの袋でいっぱいだったけど。美味しいけどね、煮干し。
後日。再びスーパーでツインテの女の子と遭遇した。ご近所さんだったのかな？そ

れにしては今まで見かけた事なかったけど。まあ何はともあれ、言いたい事があったからヨシ！

「言いそびれちゃったけど、昨日はありがとうね」

「別にいいわよ。他にも弁当はあったんだし」

「それもそうだけどね。でも唐揚げ弁当も美味しいよ？格別だよ？食ってみな、飛ぶぞ」

「相〇食堂か！はぁ……言っとくけど、今日はもう売ってなかったわよ」

「ダニィっ!?やはり売り切れるのが早い……って、今日も弁当なの？　」

「悪い？そう言うあんたも、今日も弁当っていう口ぶりだったけど？　」

「唐揚げ弁当が残ってたらそうしようと思ったんだけどね。今日は昨日の買い忘れを済ませに来たんだ」

　メモしたものを全部買ったとしても、そもそもメモに書いてなければ意味が無い。そう学びました。相田み〇を。

「ふーん、そう」

　興味無さそうな返事をし、女の子は去っていった。弁当と煮干しの袋が入った買い物カゴを手に。……昨日も煮干しを買ってなかったっけ？

「あれ？かなちゃん何食べてるの？　」
　おやつとして持ってきた物を摘んでいると、物珍しそうに袋を覗いてきた。
「煮干しだよ。ユウちゃんも食べる？　」
「ありがとうー！いただきまーす」
「奏ちゃんにしては珍しい物を食べてるわね。また何かの影響でも受けたの？　」
「受けたと言えば受けたかなー」
　連日煮干しを買い込んでいる女の子を見たせいか、無性に煮干しを食べたくなった。ピーナッツや柿の種と一緒に入ってるのしか食べて来なかったけど、煮干し単品でも美味しいね。
「あっ、そうそう。今日は転入生が来るらしいよ」
「転入生？　」
「朝職員室から聞こえたんだよ。成績優秀の生徒が増えるって。しかもこのクラスに」
「ほへ～。私なんか小テストでも駄目なのに、凄い子だね」
「勉強苦手だもんねー。ちなみにこの前の結果は？　」

「……ギリ平均です」
「ドンマイっ！　」
「聞いてきてそれはないよっ!?　」
　そこでチャイムが鳴り響き、朝のホームルームが始まる。先生が来て挨拶をすると、先程話してた通り、転入生が居ると発表される。
　ザワつくクラスをよそに、先生は外で待機している転入生を教室へと招き入れる。入ってきたその人物に目を丸くしていると、黒板に名前が書かれる。
「はい、本日から皆さんのクラスメイトになる、三好夏凜さんです」
　スーパーで連日会った、ツインテの女の子。ほへ～と驚いていると、あちらも気付いたのか目と目が合う。夏凜はあっと口だけ開き、すぐに視線を逸らす。
　自己紹介とホームルームが終わると、クラスのみんなに囲まれる。流石に今声をかけるのは難しいと思い、奏は次の休み時間に夏凜の元に訪れた。
「やあやあ。この間ぶりだね。まさか転入生とは思ってなかったよ」
「あんたがこのクラスとは私も思ってもなかったけどね」
「世間の狭さを実感したよ。そういえば自己紹介がまだだったね。ボクの名前はナ○ナゾ博士！何でも知ってる不思議な博士さっ！　」
「どこの魔物のパートナーよっ！　」

「おおー、通じた！ちなみに名前は秋月　奏。親しみを込めて安心院（あんしんいん）さんと呼ぶように」
「あんたは悪平等（ノットイコール）かっ！　」
「すっごい、これも通じたよ。才能あるよ」
「褒められても全然嬉しくもないわよ、それ」
「まあまあ。お近づきの印に、お１つどう？　」
　煮干しの袋を差し出すと、夏凜は悩んだ様子で奏と袋を交互に見つめ、結果そっぽを向いた。
「いらないわよ。自分の持ってきてるし」
「そう言わずにどうです旦那？１杯いきません？　」
「おじさんか！　」
　――――その日、少女は運命と出会う。そう、ボクはとんでもない子と出会ってしまったかもしれない。打てば響くとはまさにこの事。ボケに対し丁寧にツッコミを入れてくれる。こんなに嬉しい事はない。
「夏凜ちゃん……いやっ！親しみを込めてかっちゃんと呼ばせて貰おう！　」
「かっ……!?嫌よ、そんな変な呼び方っ！　」
「ええー？じゃあリンちゃんは？カッコ可愛い呼び名だと思うよ」
　別案としてにぼっしーとか出てきたけど、流石に怒られそうだから口には出さないで

おく。でもそう遠くない内に呼ばれるんだろうなと思いました、まる。
「せめて普通に呼んでくれない……？　」
「愛称だと思ってよ。それに、アダ名は仲良くなる為のものでもあるし。それでどう？　どう？　」
「……さっきよりはマシね……」
　渋々とだが了承を得て、アンカリング効果って本当に通じるんだなと実感した。ちなみに、アンカリング効果は「〇〇円の所を、今なら〇〇円！えー、安い！」というものだってばっちゃんが言ってた。
「それじゃあ、改めてよろしくね、リンちゃん！　」
「はいはい、よろしく」
「うん！じゃあ早速だけど……」
　メモ帳とペンを取り出し、笑みを浮かべてリンちゃんに近づく。
「取材をさせて貰ってもいいかな？大丈夫大丈夫、質問に答えて貰うだけでいいから」
　１歩、また１歩と近付くと、リンちゃんはそれに合わせて後退る。あっちから見たら黒い笑みに見えたのか、どこか戦慄したような表情を浮かべている。
「い、嫌よ！なんか嫌な予感がするわ！　」
「だいじょーぶだいじょーぶ、何も怖くないよー。次の記事のネタにするだけだから。

これでも新聞部なんだ」

更に近づくと、それ以上逃がさないと言わんばかりにリンちゃんは壁にぶつかる。

「逃げてもいいけど、転入生なんていう貴重なネタを見逃す程、ボクはヤワじゃないＺＥ？昭和の起き攻めの如く突撃するＺＥ？　」

実質「答えてくれるまで逃がさない」宣言をし、リンちゃんに迫っていく。

秋月　奏は新聞部所属。基本断られたら諦めるが、絶対に成すと決めた時、後退のネジを外してあるかの如く詰め寄る。そんなもんじゃ、憧れは止められねぇんだ。

エイプリルフール

「ミカ……もとい、望月　帝の出番は少ないと言ったね。あれは嘘だ」
「開幕コマン○ーネタをしつつ呼び出された俺の気持ちを考えた事ある？　」
「仕方ないよ。なんせこの話を書いたのは投稿日当日。つまりエイプリルフールに便乗しての内容だからね」
「成程な。じゃあ帰って寝るわ」
「待って待って！今回はミカがいないと成り立たない話なんだよ！　」
「頼みがあるんだが、俺を起こさないでくれ。死ぬほど疲れてる」
「ミカもコ○ンドーネタで返してるじゃん！　」
「うっせい。どうせ奇行な事に巻き込む気なんだろ？　」
「失礼な、奇行じゃないよ。今回はエイプリルフールパロディ回だよ」
「既に嫌な予感がするんだが？　」
「気のせい気のせい。ちなみに、内容は身内の作品のネタをボク達もやってみようってものだよ」
「パロディの枠超えて不正じゃね？許可は？　」

「取ってないけど大丈夫だよ（大丈夫じゃない）。この作品を読んでくれる人もいるけど、本人は苦笑いしながら許してくれると思うし」
「いい人過ぎるだろ。1回怒られろよ」
「その時は菓子折り持っていきます。ではっ、御託はここまで！いざいざっ!!　」

――――――壁ドン編

「もはや（周囲のせいで）定番ネタとされたやつだね」
「マジで怒られろ」
「サーセン。とりあえず、ボクが壁ドンする側でいい？　」
「なんでだよ。女に壁ドンされるとか嫌だよ」
「じゃあミカがする？そんな度胸があるとは思えないし、ボクがやった方が――――」
そんな言葉を遮るように、ミカは大きな音を立てて壁に手を付けてくる。物音に驚いたのか、急な出来事で驚いたのか、ドギマギしながら固まる。
その隙にミカは耳元まで顔を近付けさせ、小さく呟く。
「照れんなよ、可愛いやつだな」

――――顎クイ編

「これは執筆しながら現在通話している相手のネタだな。あの人は絶対許してくれる」
「ね、ねぇ。言い出しっぺのボクが言うのもなんだけど、もう止めない……？　」
「文字数が足りてないんだ、諦めろ」
「普段そんなメタ発言しないよね!?なんで今に限ってそんな事言うのっ!?　」
「全てはエイプリルフールってやつが悪いんだ」
「作者ぁっ!!　」
　嘆いてる中、ミカはそっと右手を顔に添え、優しく微笑んでくる。
「ちょ、タンマタンマっ！待って！1回待ってっ!!　」
　さっきの事で収まってない心臓の鼓動が、より早くなっていくのを感じた。しかし、そんな奏の事など容赦無しに、顎を軽く持ち上げてくる。
「まったく甘えん坊だな、かなは？これからもっとめちゃくちゃにしてやるよ」

――――〇〇〇〇〇〇編

「待って……本当に待って……（キャパオーバー）」

何度もそう呟きながら、体育座りで顔を隠して縮み込む。流石にやり過ぎたかと思うが、思うだけで反省はしていない。というか、お題が出されたのに見ざる聞かざる状態のかなをどうするか考える。

お題とかなを交互に見て、1人納得したように頷く。気づかれないように背後に回り、後ろから優しく抱きしめる。それに反応して顔を上げてくると、羞恥心で赤くなっていた。

そんなかなに、立ち上がる様に催促する。本当に何も考えられてないのか、抱きしめられた形のまま素直に立ち上がる。限界突破しているのかわなわなと震えてるが、そんなかねに一言呟く。

「もう、放さないから……」

「……夢」

それだけ呟き、何も考えられないまま奏は身支度を済ませる。ぼーっとしながら登校していると、見知った姿が視界に移る。

「ん？かなか、珍しいな。おはよ」

「……」

「……どうした？　」

「っ……」

「熱でもあんのか？顔が赤――――」

顔を覗き込んできた瞬間、ミカの足を両腕で抱え込み、ジャンプして捻りを加えながら、巻き投げの要領で投げ飛ばす技――通称ドラゴンスクリューをかけた。

「いっっっっっってぇぇっ!?何するんだコラっ!!!　」

「うるさい!!そしてごめんねバーカっ!!!　」

「意味分かんねぇよ!?　」

倒れてるミカを置いていき、走ってその場を去っていく。夢とはいえ、未だに照れ臭くささと恥ずかしさでいっぱいの為、まともに顔を見る事が出来なかったのだった。

「ってお前がなる夢を見た」
「面白い話をしてって頼んで珍しく話したと思ったら、まさかの夢オチに夢オチを重ねるとは。オチとしてはそれは駄目じゃない？　」
「面白い話をしてっていう話の振り方をするのも駄目だと思うが？　」
「おうおうミカさんよ。内容について触れなかっただけマシだと思ったらどうかね？なにかね？チミは、そんなにボクが慌てふためく所が見たいのかね？　」
「まあ見てて面白いからな」
「こっちはたまったもんじゃないんですけどねぇ！　」

１１．黒〇閃

「うーん……」
「どうしたんですか、部長？　」
　昼休み。新聞部部室で記事作りをしていたのだが、部長がずっとうーんうーんとうねっていた。
「それがなー。今回から空いた新聞のスペースに、何の内容を入れるか悩んどるんや」
「あー、前回で終了したコーナーの部分っすね」
「そうそう。２人共、なんかいいアイディアあらへん？　」
「うーん……」
「うーん……」
　パッと思いつかず、副部長と一緒にうねりあげる。
　何かないか。変わった記事は自分が担当しているし、出来るだけオードソックスの方がいいだろう。四コマ漫画は前回（ネタ切れの為）終了したし、かと言って他にやれる事は……。
「中々思いつかへんなぁ。猫の手でも借りたいもんや」

「猫の手……はっ！　」
　その時、奏に電流が走る。舞い降りてきたぞアイディア！
「部長、副部長！思いつきましたよ、新コーナーっ！　」
　その内容を伝えると、二つ返事でＯＫしてくれた。奏はすぐさま行動に移し、部室から飛び出して目的の場所へと向かう。
「地獄からの使者っ!!秋月　奏っ!!いっちゃんいるっ!?　」
　1年生の教室だろうとお構い無しに扉を全力で開け、勇者部唯一の1年生、犬吠埼樹の元に現れる。
「奏さん、目立ちますから止めて下さい……見てるこっちが恥ずかしいですよ～……」
「姉妹揃って同じ反応だねー。いや、それはいいんだよ。それより、確かいっちゃんは占いが得意だったよね？　」
「は、はい。得意ですけど、もしかして何か占って欲しいんですか？　」
「ＹＥＳＹＥＳＹＥＳ！勇者部に依頼という事で、新聞部の記事で占いコーナーを設けたいんだ。どういう方向性にするかは決めてないけど、そこら辺も含めて話し合いたいんだけど、どう？　」
「えっと、わ、分かりました。でも、一応お姉ちゃんにも伝えた方がいいかと」
「風先輩にもだね。分かったよ。では、サラダバー！　」

　１年の教室から３年の教室へ向かい、前口上を述べながら扉を全力で開ける。
「ボクの名前は秋月　奏。ボクの宇宙じゃ１９３３年、職業は探偵、好物はミルクセーキ。あと悪い奴らをぶん殴ること！刺激を求めてマッチを擦っては指先を焦がそうとする！　」
「なんで風も吹いてないのにコートがはためいてんのよ……」
「ボクがいる所に風は吹く――――その風は、雨の匂いがする。というのは冗談として、道中に美術部から専用のコートを借りてきたので」
　美術部特性コートに仕込まれたスイッチを切り、畳みながら風先輩の席に向かう。
「それで、また同行許可でも貰いにきたの？　」
「いえいえ。今回は依頼ですよ。いっちゃんには既に話したんですけど、カクカクシカジカ四角いムーヴで……」
「へー、奏にしてはまともね。いいわよ。でも、今週は他の依頼もあるし、来週でいい？　」
「はい、全然大丈夫です！ありがとうございます！　」
「いいって事よ。それじゃ、そっちの部長さんともの予定を話し合っておくから」
「はーい！ではよろしくお願いします！　」
　そうして時間は飛んで翌週。水曜日に予定が組まれたのだが、どうやら勇者部は今週

めちゃくちゃ依頼があって忙しいらしい。
　ユウちゃん達は楽しそうにしてたけど、リンちゃんは「風の調整ミスのせいね」とボヤいていた。
　そのためバラバラで各依頼に当たっているらしく、新聞部には話してた通りいっちゃんが来た。
「それじゃ事前に話してた通り、恋愛関係の占いでいこかー」
「いっちゃんって何の占いが得意なの？　」
「色々やってますが、1番はタロットですね」
「そんじゃ、タロット占いのコーナーっすかね」
「じゃあ、題名は仮で『樹ちゃんの恋愛タロットコーナー』で進めますかー」
　黒板に話した事を書き込んでいき、話が一区切りついた気がする。……まだツッコミいれないのかな？そう思いながら、部長を一瞥する。
「それじゃ樹ちゃん。恋愛タロットのコーナーよろしくねー」
「はいっ」
「……で、なんで呼んでない風やんがいるんかね？可愛いから写真撮っていい？　」
「んーーー？　」
　ようやく触れられたが、いっちゃんだけが来る予定――だったのだが、何故か風先

輩がいっちゃんの頭に顔をちょこんと乗せていた。
「恋愛コーナーといえば犬吠埼風のことよ」
「とのことで……」
「ちょっと何言ってるか分かんないっすね」
どや顔で言った言葉の影に、恋愛マスターの文字が見えた気がした。
「コーナー名は『女子力王のぱーふぇくと恋愛講座』でどうかしら？　」
「女子力王のぱーふぇくと恋愛講座、と」
「いや黒板に書かなくてええからな、かなやん」
更なるどや顔で言われて面白かったので、思わず追加しちゃったんですよ部長。
「いっそ『犬吠埼姉妹のぱーふぇくと恋愛コーナー』はどうかしら？　」
「わ、私も!?　」
「いやほんと」
「犬吠埼姉妹のぱーふぇくと恋愛コーナー、と」
「書かなくていいっすよ、秋月」
グダグダになってきた会議だが、結果はいっちゃんによる『恋愛タロットコーナー』で決定した。終始風先輩が「あたしは？　」と言ってきたが、部長がお引取り願った。
しかし、しばらく時が経ったあと、番外的に『恋愛マスターからの一言』がコーナー

に侵食してきたのであった。

１２．燃えろ!!ボクの小宇宙（コ〇モ）!!【前編】

暖かくなってきたというか最早暑くなってきた中で行われる学校行事、体育祭。徒競走やリレー、玉入れや綱引き。地域によっては障害物競走や棒倒しなど、多数ある種目を行うものである。

インドア系の者やめんどくさがり屋の者にとっては億劫であるが、運動大好きな者たちにとっては楽しいイベントだろう。

「ちなみに、ボクはイベント大好き人間です！　」

「そりゃそうでしょうね」

「私もイベントとか好きだよー。楽しいしね！　」

「あと、お昼ご飯が楽しみだね！　」

体育祭とかのお昼の弁当は、いつもの違って豪華になるので楽しみの１つである。ちなみに、今日はミカに頼んで弁当を作って貰った。勿論半額負担で。

「それにしても、同じクラスでも紅組白組と分かれるなんて、変わった制度だよね」

「私達は紅組。東郷は白組ね。あと、風と樹も白組よ」

「東郷さんとは別チームなんだよね……」

「勇者部も見事に分かれたね。あっ、だからさっき風先輩達が来てたんだ」
普段は仲良しの勇者部だが、さっきの様子を見てた限り、両者やる気満々のようだった。あと気になる事といえば、ユウちゃんと別々に分かれたせいで、東郷さんが暴走しないかどうかだけど。
「そう、宣戦布告をされたの。いい、狙うのは完全優勝よ！奏も、やるからには情けない結果を出すんじゃないわよ！　」
「サーイエッサー！　」
「その意気よ！……ところで、朝から東郷の姿を見てないけど……」
「あれ、リンちゃん知らなかったの？　」
「東郷さんね、凄いんだよ！司会進行役に抜擢されたの！　」
「え、そうだったの？　」
噂をすればなんとやら、ちょうど軽快な音と共に放送が流れてくる。
『えぇー、おほん。此度の体育祭、司会進行役を務めさせて頂きます。東郷美森と申します』
「わー！東郷さんだ！早速、頑張ってるんだね」
「なんか嫌な予感がするんだけど」
「暴走しないといいけどねー」

『それではまず、戦地に赴かれる皆様を鼓舞すべく、祖国の成り立ちからお話しさせて頂ければと思います』
「あ……うん。東郷さんらしい進行だね」
「うん、良かった。いつもの東郷さんだ」
「駄目でしょ、これ！　」
『え、なんですか？もっと柔らかい感じで？体育祭らしく??喇叭（ラッパ）も必要なし、と……そ、そうですか』
　放送を切り忘れたせいか、注意されたような会話が流れる。会場がざわめく中、３人はあちゃぁ……といった様子で成り行きを見届ける。
『って……えぇ!?今のも流れ――――』
「いきなり放送事故じゃない……先行きが不安なんだけど」
「まあまあ、最初は誰でも緊張しちゃうから」
「あれは緊張じゃなくて、多分嬉々として語りたかったんだと思うよ……」
『えぇー、先程はお聞き苦しい放送となり申し訳ございませんでした。……祖国の成り立ちに関しましては、後日東郷まで。
　おほん！では、只今より……讃州中学校体育祭を始めます！　』
「さぁ、紅組が絶対に優勝するわよ！　」

「うん、絶対優勝だーっ！　」
「おーっ！　」

―――――

「次は男子の１００ｍ走かー。おっ、ミカも走るんだ」
応援席から観戦していると、ミカがレーンに並んでる姿を確認する。どうやら走るのは次のようで、すぐに出番が回ってくる。
開始のピストルが鳴り、一気に飛び出す。料理部の癖に2位で走り進めているが、3位の男子も追い上げてきて、1位との差も開こうとしている。
「まだ――――っ！このままじゃ……こんなところじゃ……！終われない!!だろ？ミカァァっ!!!　」
「うっせぇぇぇっ!!!　」
などと言いつつ、ミカも速度を追い上げていく。ゴールは目の前。1位の男子と並んで最後まで走りきる。結果は僅差で、ミカが1着でゴールしたようだ。

「なんだよ……結構いけるじゃないか……」
「お前メイスで殴ってやろうか？　」
　その後、ミカは５０ｍ走も走ったのだが、結果は3位だった。そして奏は叫んだ。「何やってんだミカァァァッ!!」と。そしてミカは殴りながら言った。「ごちゃごちゃうるさいな」と。
　次の競技は女子１００ｍ走。これには奏も参加するのだが、相手にするのはスポーツの申し子古橋さん、女子バレー部エース堀北さん、ハーフである朝比奈さんだった。
「いや、単発キャラなのになんでそんな高スペックなの?こんなの絶対おかしいよ」
　気分は女豹の群れの中に放り込まれたマルチーズだ。こちとら文化系の人間だよ?ごめんねリンちゃん。やるからには勝ちに行くけど、相当厳しいよ?
　そう思っていた時期が、ボクにもありました。まさかまさかのボクが1位。理由は堀北さんがスタート直後に転倒、朝比奈さんがコーナーで転び、それに古橋さんがつまづいたのだ。まるでＦ1みたいな事故だった。
「番狂わせにも程があるでしょ……」
「結果良ければ全てヨシっ！　」
　この後、リンちゃんと風先輩が５０ｍ走で対決する事になった。結果だけ言うと、リンちゃんの1位。オマケに短距離系は全て1位による完全制覇をしていた。

『では、ここで中間結果の発表です。紅組２６９点。白組１６７点で……紅組が圧倒的に優勢です！　』

「１００点差っ!?　」

「す、凄い！きっと、夏凜ちゃんの連続優勝のおかげだね！　」

「まぁ、予想通りの展開だけどね」

「うう、点が開いちゃったね……」

「気にする事ないわ、樹！なんたって次の競技には東郷も出るんだし！　」

「そ、そっか！東郷先輩、自信満々だったし、逆転出来るかもだね！　」

「？次の競技ってなんだっけ？　」

「えっと、確か……」

「お待たせしました。風先輩、樹ちゃん。東郷美森、遅ればせながら白組に参戦させて頂きます！　」

　思い出そうとしたところで、東郷さんが現れた。

「待ってたわよ東郷！　」

「東郷先輩、よろしくお願いします！　」

「さぁ、東郷も加わって、次は我らが白組の最大の見せ場――――」

「……見せ場？　」

眉唾を呑み込み、風先輩の続きの言葉を待つ。
「ズバリ、玉入れよ!!　」
「ぷふっ……玉入れが……白組最大の見せ場」
「むっ……」
思わず吹き出したリンちゃんに、東郷さんは目を細める。
「玉入れ……東郷さん……何か忘れてるような気がするけど、なんだったっけ……？　」
思い出せないという事は、大したことではないかもしれない。でも、嫌な予感がする。これを思い出さないと、痛い目を見ることになると。
「まあ、そんな風に呑気に笑っていられるのもここまでよ」
「ですよっ！　」
「玉入れを笑う者は、玉入れに泣く……夏凛ちゃん、奏ちゃん、友奈ちゃん！あなた方紅組の勢い、私が撃墜します！　」
「いいわ、受けて立とうじゃない！ムフフフッ！玉入れ……ムフフフッ！　」
笑いを堪えきれない様子で玉入れに望んだ紅組。しかし、風先輩の言った通り、笑っていられたのはその時までだった。
「あら、どうしましょ。籠がいっぱいで、もう入りそうにないんだけど……」

「「えぇー!?!!」」

東郷さんの抜群のコントロール力で投げられた玉が、白組の籠をいっぱいにしたのだった。その時、奏は思い出した。東郷さんのコントロール力を。遠距離から一方的に制圧された恐怖を。

「試合終了ね。東郷　美森、玉入れ……完・遂！　」

「ちょ、ちょっと！私っぽい台詞言わないでよ！　」

「でも夏凛ちゃん。今の状況で、私以外に言える人はいるかしら？　」

「むむぅ！……完・敗」

「あはは……（と、東郷さん。玉入れを笑った事、怒ってるよね？）」

「あはは……（怒ってるね……あまり触れないでおこう）」

そこで話が終われば良かったのだが、東郷さんの進撃は終わらなかった。出られる競技も少ないという事もあり、残りの2戦の玉入れにも出場出来るのだった。

奏は後に語った。一方的な蹂躙。一切の慈悲もなく、我ら紅組を葬った国防の戦士が居た事を。

「次は綱引きだね」

「男子と女子で分かれてやるのはいい事ね。けど、相手には馬鹿力の風が居るわ。気を引き締めなさい！　」

「誰が馬鹿力よっ！　」
「この距離で聞こえてた!?　」
　開始のホイッスルが鳴ると、両組は掛け声と共に綱を引っ張り合う。
『オーエス！オーエス！　』
「オーエスオーエス！……ところでオーエスってなんだろ？　」
『オーエス！オーエス！　』
「オーエスってなにー!?　」
「いいから引っ張りなさいっ!!　」

「待ちに待ったお昼ご飯！というわけでミカ！弁当を受け取りに、ボクが来たっ！　」
「後で絶対半額返せよ？絶っっ対だかんな？」
「分かってる分かってる！ほらほら、早く弁当ちょうだいな？　」
　話を聞いてないなコイツと顔を歪めながらも、弁当を渡してくる。だが、おにぎり２

個分がせいぜいのサイズで、首を傾げる。
「しかし、お前にしては珍しい物を頼んで来たな」
「あれ？そんなに珍しい物を頼んだっけ？　」
　思い出せないなら実際に確かめればいい。弁当を受け取って開けると、綺麗に焼かれた焼き鯖だけが入っていた。
「……ねえミカ。ボクが頼んだのってなんだっけ？　」
「は？焼き鯖だろ？　」
「焼きそばだよっ!!!　」
　焼き鯖を見た事で頼んだ物を思い出し、全力で叫んだ。
「あー、もしかして聞き間違えたか？すまんかった」
「そんなため〇ならない問題じゃないよ！由々しき問題だよ！　」
「そうか？でも似てるじゃん。だって一文字しか違わないし」
「そういう問題じゃ……はあ、もういいよ。で、ご飯は？　」
　この際、勿体ないしお腹も空いたから焼き鯖は食べるとしても、せめてご飯は欲しい。あと他のおかずも欲しい。
「ん？どゆこと？　」
「白飯だよぉぉぉ!!」

「え？いや、そんだけだけど」
「単品でどうやって食べろっていうの!?　」
「いやだって、お前が焼き鯖って言ったから」
「焼きそばだよおおおぉぉぉ!!!

焼いた！

そば！

だよおおおおおおおおおおお!!　」

楽しみにしていた体育祭によるお昼ご飯。それが焼き鯖単品のみ。奏は決意した。かの邪智暴虐のミカを許してはいけないと。
「これだけでどうしろって言うの!?ならミカの弁当を分けてよっ!?　」
「残念だ、かな。実を隠そう、他の連中にも目を付けられてて俺の弁当も危ういんだ。下手したら軒並み持っていかれる」
「この料理上手がぁぁっ！じゃあボクのご飯はどうなるのさ!?　」
「唯一死守した鯖があるだろ？　」

「鯖ぁぁぁぁっ！　」
「聞き間違いぐらいは誰でもあるって。お前の友達にご飯も分けてもらえよ。元気玉みたいにさ」
「それは被害者側が言うセリフだよアホー！　」
「普段からアホみたいな事をしているお前が言うか！ほら！お前が頼んだ焼き鯖だっ！とっとと食えっ!!　」
「焼きそばでしょうが!!!　」
何度目か分からない叫びをし、頭を抱える。そんな奏に、ミカは笑いを堪えながら肩に手を置いてくる。
「安心しろ、かな。本当の弁当はこっちだ」
そう言って大きめな弁当を渡してくる。ミカと弁当、そして焼き鯖を交互見て、深呼吸する。
「最初から渡してよ！無駄に文字数使ったじゃん！ミカがボケに回るとろくな事がないよ！　」
「お前もノリノリだったろうが。それより、白飯も焼きそばも唐揚げも入れてるから、焼き鯖もきちんと食えよ」
「わざわざこのネタをやる為に焼き鯖を作ったんだ……」

　呆れながらも弁当を受け取り、早速弁当を開ける。玉子焼きにタコさんウインナー、その他奏の好きな物でいっぱいだった。
「何はともあれ、ありがとうミカ！すっごい美味しそうー！　」
「食うならさっさと食ってこい。昼休みも長い訳じゃないんだからな」
「なら一緒に食べよっか。ついでにミカの弁当もつまみ食いさせて貰います！　」
「絶っっっ対食わせん」
　そう言ったミカだが、結局おかずを少しだけ分けてくれた。というか焼き鯖も美味しかった。これは他の人も弁当狙うよ。ボクも狙うもん。美味しいもん。
　昼休みを終え、午後の競技が始まる。内容は「借り人競走」で、紙に書かれたお題に合った人を連れてくるというものだ。先輩、後輩、先生。〇〇部の人や、眼鏡をかけてる人と様々なお題が出される。
　ユウちゃんといっちゃんも出場したのだが――――
「私の方がお姉ちゃんの事が好きなんです！　」
「わ、私だって、いつも頼りがいがあって、励ましてくれる風先輩のことが……！　」
「アタシのためにケンカしないで！　」
　お互いお題の人物が同じだったようで、風先輩を取り合っていたのだった。
「これって競技よね？……って、なんなのこの昼ドラ音楽は!?　」

「アハハハハハハ！ま、待って、面白い事になったよ！ひー！　」

観戦していたリンちゃんは呆れながらもツッコミをし、奏はお腹を抱えて爆笑していた。更に昼ドラ音楽と東郷さんのナレーションにより、笑いに拍車がかかったのだった。

『犬吠埼風――――彼女へと突然突きつけられた２人の女の想い』

「風先輩、お願いします！……私には、他に頼れる人がいないんですっ！　」

『大切な仲間――――確かに……この時まではそう思っていた』

「友奈、貴方……くっ」

『しかし、犬吠埼風には樹という心に決めた相手がいた』

「お姉ちゃん……好きなのっ！　」

「分かってるっ……分かってるのよ……！　」

「風先輩！私と、樹ちゃん……どっちを選ぶんですか!?　」

「お姉ちゃん!!　」

『果たして、２人の女の前に、犬吠埼風の出す答え。それは――――』

観戦席から、息を飲む音が聞こえる。一同に静寂が流れる。その為、奏も声を殺しているが、笑いで身体が震えていた。

「うぅ……駄目よ……アタシには、選べないっ！　」

「白旗挙げた!?ってことは、ドローなの!?　」
「ひー！お、お腹痛い！アハハハハハハ!!　」
『この勝負、引き分けです！　』
「ホント、何やってんだが……」
　勇者部メンツによる茶番じみた光景と、笑い過ぎて動けなくなってる奏を見て、リンちゃんは大きくため息を吐いたのだった。

13．特異点・冠位讃州中学校　ＵＤＯＮ（ウドン）【後編】

『始まりがあれば終わりもある。皆さん、お待たせしました。両者僅差で迎える体育祭最後の競技……「騎馬戦」の開始です！騎馬！用～意っ！　』

「友奈、奏。泣いても笑ってもこれが最後。悔いのないよう思う存分戦い……そして、優勝をもぎ取るわよ！」

「泥舟に乗ったつもりで任せてよ！　」

「せめて普通の船にしなさいよ！　」

「これって、鉢巻を先に取った方が勝ちだよね？頑張るよ！　」

　気合いを入れていると、相手も騎馬を組み終えたのか、開始地点に並んでいく。

「どうやら、白組も準備が出来たみたいね」

「勇者部は全員、騎手だね。うぅ～、緊張してきた～！　」

「ふふっ、役者は揃ったわね！」

「犬吠埼風！あんたとは白黒つけようと思っていたのよ。いい機会だわ！　」

「先輩に対する口の聞き方がなってないわね。体に教えてあげる！　」

『それでは、両者準備が出来た様なので、宣誓を頂きます。まずは紅組から』
「って、人が意気込んだ後なんだから始めなさいよ！」
「そういえば、かなちゃんが運営に提案して承諾して貰ったって言ってたよ。そして、かなちゃんがその宣誓に抜擢されたんだって！凄いよね！　」
「人選ミスじゃない？奏がやるって事は、きっと何かやらかすつもりよ。上級生も奏で納得したの？　」
　そんなリンちゃんの心配をよそに、奏にマイクを渡される。だが、首を横に振って断り、代わりに大きな旗を要求する。困惑されながらも用意して貰った旗を頭上高くに掲げ、声高らかに宣誓する。
　恐らく上級生、そして運営側は奏の提案と立候補で、こう思ったのだろう。「次はどんな寸劇を楽しませてくれるのか」と。だからこそ、その期待に応えよう。
「聞け！この領域に集いし、一騎当千、万夫不倒の紅組達よ！本来相容れぬ敵同士、本来交わらぬクラスの者であっても、今は互いに背中を預けよ！
　我が真名は秋月　奏！神樹様の御名のもとに、貴公らの盾となろう！」
　旗を振り回したあと地面に突き立て、顔を上げて前口上を口にする。
「我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！我が神はこ（リュミノジテ）――――――！　」
『えー、では白組からの意気込みも聞いてみましょう』

「せめて最後まで言わせてよぉっ！　」

　嘆いてるところを無視するようにマイクが白組に渡される。一息吸う音が聞こえ、音割れ寸前の大声で白組も宣誓する。

『クッ――――クハハハハハ！いいだろう！総力戦を望むというのなら、答えてやる！』

「ノリが大変宜しいようで！　」

「もう滅茶苦茶よ！　」

『それでは、よーい……始めっ!!　』

　開始の狼煙が上がると同時に、両者相手へと突撃していく。

「おりゃー！犬吠埼風に向かって前進よ！　」

「ところがギッチョン！　」

　リンちゃんの騎馬の前に阻まるように、３組の騎馬が立ちはだかる。

「オレの見立てでは、お前の実力は戦闘力は６００００程と見た……故に、先に潰させて貰おう」

「ここから先は通さないと言っておこう」

「行きますよ、ダー〇ンさん、ド〇リアさん」

「あ、あれは!?讃州中学のギ〇ュー特戦隊！トラ〇アルシステムの兵藤さん！そして、単

発キャラだと思っていたフ○ーザ……じゃなくて、古橋さんだ！」
「なによそれ!?というか、なんで兵藤って奴は上半身裸なのよ!?　」
　リンちゃんの疑問に、奏は過去に兵藤に取材した事を思い出す。「何故放課後になると、服を脱ぐんですか?」と聞いた事を。兵藤は答えた。「お前は今まで食べたパンの枚数を覚えているのか?」と。
　流石の奏も「この人は何を言ってるんだ?」と理解が追いつかなかったが、何か面白かったので採用した。
『おおーっと!こんな事があっていいのでしょうか!開始早々に、見事な驀進(ばくしん)を見せた白組、犬吠埼樹が落馬ですっ！』
「樹～～!!くっ、許さないわよ紅組！　」
「今のは自滅でしょうが！　」
「隙を見せたな!貰ったっ！　」
「しまっ――――！　」
　ギ○ュー特戦隊がリンちゃんの鉢巻へと手を伸ばそうとするが、その間に奏の騎馬が割り込む形で相手の鉢巻を奪い取る。
「ここは、ボク達にお任せを！　」
「あんたはいつまでジャ○ヌをやってるのよ!でも助かったわ、行くわよ友奈!――――

―って、何処に行くの!? 」
「ええ、ありゃ……バランスが上手く取れなくって!?あわわわわ……」
『そんな、有り得ません!見事な意思不通!紅組、結城友奈の乗る騎馬が運動場から飛び出し……学校の外へ! 』
「なんでそうなるのよ!? 」
ツッコミながらも、リンちゃんの騎馬は前線へと向かっていく。その間、奏は残りの2組の騎馬と対峙する。
「秋月 奏さん。短距離走では遅れを取りましたが、ここで貴女とのケリをつけさせて貰いましょう」
「いや、あれはF1並の事故が起きただけだったから」
「だが、敗北は敗北だ。彼女の汚名を晴らす為にも、ここで消えて貰おう」
「物騒過ぎないですか!?でも、ボクもそう簡単にやられる程ヤワじゃない。押し通らせて貰いますよ」
啖呵を切ったはいいものも、数的不利なのには変わりない。何か手を考えないとすぐに取られてしまうだろう。周囲を見ると乱戦状態でもある。助っ人は望み薄かもしれない。
「なら、まずは古橋さんから行こう!前進前進―! 」

「私からですか。ですが、それは浅はかというもの」
そう言って指を鳴らすと、兵藤さんがサラダ油を手に構える。いったい何をする気だと警戒すると、蓋を開けて自分の身体にぶっかけ始めたのだ。
「えぇ……」
珍しくガチ引きしていると、その間に古橋さんがこちらに詰め寄ってきていた。鉢巻を取られないように避けると、古橋さんの背後から兵藤さんの姿が映る。
「ナ〇レっ!!!　」
ポージングを取りながら叫ぶと、サラダ油でテッカテカになった身体が、太陽の光を反射して目眩しをしてきたのだった。突然の事で目がやられてしまい、騎馬も崩れそうになる。
「見たか！これがガ〇ダムマイスターにのみ与えられた、トラ〇アルシステムだ！　」
「素直に言って阿呆ですよそれ！　」
「ほっほっほっ。よくやりました兵藤さん。では、トドメは私自らしてあげましょう」
まだ目が治っていないが、こちらに近づいてきている足音だけは聞こえる。抵抗したいところだが、下手にすれば怪我をさせるかもしれない。
ここまでかと思ったが、近づいてくる足音は古橋さんだけじゃなかった。兵藤さんの騎馬だと思うが、もしかしたらと不敵な笑みを浮かべる。

「まだだ――――っ！このままじゃ……こんなところじゃ……！終われない!!だろ？ミカァァっ!!!」

叫び声を上げた瞬間、古橋さんの短い悲鳴が聞こえた。ようやく見え始めた目を開くと、ミカが古橋さんの鉢巻を奪っていた。

「お前はいちいちうっせぇんだよ。ところで……あの変態はなんだ？」

引き攣った顔で、腕を組んで堂々としている兵藤さんを指差す。

「不意打ちとは卑怯な事を。何者だ？ちなみに、俺は3年の兵藤だ」

「これで先輩なのかよ……望月っすけど。騎馬戦中に呑気に話してる場合じゃないでしょ」

極力触らずに鉢巻を取ろうと構えるが、兵藤さんは意に返さず話を続ける。

「そうか、望月か。お前に聞きたい事がある」

「無視かよ」

「どんな女がタイプだ？」

この場にいた全員に、静寂が流れる。何を言ってるんだこの人は？とまた理解が追いつかなかった。どこの葵さんよ？

「どんな女がタイプだ？」

「いや聞こえなかった訳じゃないんで。それに別にいいでしょそんなの」

「答えなければ、お前もサラダ油まみれにするぞ？　」
「テツカテカな理由はそれかよ。油の無駄使いすんな、燃やすぞ変態（家庭部）」
「気をつけてミカ！兵藤さんにはトラ〇アルシステムが搭載されてるよ！　」
「さっきから頭が追いつかないから、情報量を増やさないでくれ！　」
「答えろ！どんな女がタイプだっ!?　」
「あーもうめんどくせぇ！いいから取らせてもらうぞ！　」
　痺れを切らしたのか、兵藤さんに前進する。それを迎え撃つ為に構えるが、兵藤さんの騎馬は一向に動こうとしない。
「どうした、お前達!?動け、お前達!!何故動かん!?　」
「いい加減にしろよ、この変態野郎……」
　油まみれになっている騎馬の人が呟くと、ライターを取り出す。
「よ、よせ……やめろっ！　」
「グッバイ、変態野郎」
「そうはさせねぇから安心しろ」
　ライターに火が点いた瞬間、ミカは殴り飛ばす様に鉢巻を奪い取る。騎馬から離れた場所に落ちたおかげか、兵藤さんは燃やされる事はなく、無事鉢巻も奪い取れた。
「たくっ。なんでこう、変人ばかりの相手をしなきゃいけないんだ」

「いやー、助かったよ。ところでミカよ」
「なんだよ」
「どんな女がタイプだ？　」
　兵藤さんの真似をしながら聞いたが、ミカは表情を変えずに、奪った鉢巻と奏を交互に見つめる。
「そうだな。この鉢巻を受け取ったら言ってやるよ」
「あれ？絶対答えないと思ったんだけど？まあそれでいいなら受け取――――」
　差し出された鉢巻を見ると、大事な事を失念していた。兵藤さんの鉢巻は、サラダ油まみれになっている事。そして、ミカの手もサラダ油まみれになってることを。
「ごめん前言撤回。やっぱり要らない」
「いいから受け取れ。聞きたいんだろ？俺もこれ以上持ってたくないし、ｗｉｎ―ｗｉｎの取引じゃねぇか」
「ボクも持ちたくないよ！後退後退！あの鉢巻を持ってる騎馬から全力で逃げるんだっ！　」
「逃がす訳ないだろ……！　」
『なんということでしょう！紅組、味方同士で争いが起きています！いったい誰がこんな事を予想したでしょう！　』

「なにやってんのよあんた達っ!?　」

リンちゃんのツッコミが聞こえた気がするが、今はそれどころではない。なんとか騎馬の群れを掻い潜って逃げているが、ミカの騎馬も負けずと追いかけてくる。

いつまでこの不毛な争いを続けるのか？と両者の騎馬は思っているだろうが、その思いが仇となった。兵藤さんの残した、サラダ油まみれの地面。そこに踏み込んでしまったのだ。

１人が滑ると、他の人も巻き込まれて滑る。その結果、両者の騎馬は崩れ、サラダ油の上へと落ちていったのだった。

『残ったのは、白組　犬吠埼風と紅組　三好夏凛！一騎打ちです！　』

そのアナウンスに、油まみれになった2人は顔を見合わせる。

「……ミカ。その鉢巻を受け取るよ」

「いや、もう落馬した後だから駄目だろ」

「だよね……不幸だぁ」

大きくため息を吐き、ひとまず油まみれの地面から退散する。幸いシャワーを借りる事が出来たが、その間に騎馬戦は終了。同時に、体育祭の幕が下ろされたのだった。

結果を聞くと、近年稀に見る同点ドロー引き分け。熱い勝負が繰り広げられていた体育祭だったと思うが、最後の最後で不毛な争いそのものをしてしまった。

「ボク達は、どうして……こんな所まで、来てしまったんだろう」
「お前が受け取るって言ったからだろ」
「ミカのせいでもあるでしょうが！いいじゃん別に！女の子のタイプぐらい！減るもんじゃないし！」
打ち上げでうどん屋でうどんを食べながら、ヤケクソ気味に言い放つ。油でベトベトになって散々な目にあったのを、まだ引きずっているのだ。
ちなみに元凶である兵藤さんは、これに懲りたら服を着なさない。そしてサラダ油を変な使い方するなと先生に注意されていた。
「そう言うお前は、男のタイプとか聞かれて答えられんのかよ？」
「あっ、いや～……そういうのはボクにはよく分かんないからな～……」
「お子様が」
「うっさいなぁ！ミカだって答えられなかったんだからお子様でしょ！」
うどんを一気に口にすすり、無理矢理一息つく。うどんうっま！香川のうどんは世界一ぃ!!
そんなくだらない事を考えていると、ふとミカは食べる手を止めてこちらを見つめている事に気が付く。
「なに、どうしたの？お腹いっぱいなの？それとも、ボクの顔になんか付いてる？」

「……いや、やっぱりお子様だなって思っただけ」
「さっきからなんなのさ!?喧嘩売ってる!?　」
　奏の文句に意を介さず、ミカは食べる手を再開させる。結局好みのタイプについては話されることはなかったが、代わりにうどん代を奢って貰えたのだった。珍しく、文句も言わずにだ。訳が分からないよ。

14．物書きの苦難、無き締切に追われる者

秋月　奏が所属する新聞部には、学期事に発行している小冊子がある。その学期で起きた出来事を面白おかしく纏めたもので、生徒や先生からも評判だ。

そして、今学期も小冊子を発行するべくネタを集めたり記事を作ったりしているのだが――――

「新聞部、まさかの大ピンチっ!!」

半ばヤケクソ気味になりながら、1人部室で編集作業をしていた。他の部員は風邪や食中毒、怪我なんかで相次いでダウンしており、編集作業を出来るのが奏しか残っていなかったのだ。

今回は小冊子を発行出来ないかもしれないと言われたが、唯一生き残った奏は「人よ願え！あなた達に不可能はない！何故ならば――――ボクがここにいる!!」と引き受けた。

……引き受けた迄は良かったのだが、思った以上の過酷なスケジュールだったのだ。他の人の調べていた最中のものや記事作成の引き継ぎ。各所に取材や調べ物をしたり等、学校だろうが自宅だろうが、日夜奮闘していた。

「まだまだ残ってるよぉ……ボッ〇ンにでも助っ人を頼もうかなー。まあいないんだけどさー……」

眠気と疲労で頭もろくに回っておらず、もはや半泣き状態で記事の下書きを書いている。助っ人……助っ人……。

「はっ、そうだ！ス〇ット団だっ！　」

閃いた直後、新聞部メンツに連絡を入れる。居るではないか、讃州中学校のス〇ット団が！

全員から返信が返ってきた所で、３年の教室。もとい風先輩がいる教室へと訪れる。

「ボクの名前は秋月　奏！多くの人達に助けられ、多くの人達の代わりにここにいる、新聞部のマスターー！勝負だ……ゲーーー〇（風先輩）ィアァァ!!　」

「当て字で物騒な事を言うんじゃないわよ！　」

「まあまあ。それは一旦置いといて、用件があります」

「急に落ち着くんじゃないわよ……それで、また取材の許可でも取りに来たの？毎度言ってるけど、マメねホント」

「いえ、今回は勇者部に依頼を頼みに来ました。内容はというと――――――」

「という訳で、みんな仕事よ！　」
「今度は何を請け負ってきたのやら……」
「それが一大事なんだよ、リンちゃん」
　風先輩と共に勇者部部室へと訪れ、扉からひょっこり顔を出す。
「あれ？奏さんも一緒なんですか？」
「もしかして、かなちゃんの依頼？　」
「最近疲れてるようだったけど、何かあったの？　」
「優しさが染み渡るわぁ。実はかくかくしかじかホトトギスで……」
　新聞部の状況。そして小冊子の発行が危ういという事を説明する。
「なんでそんな大変な事に……」
「いったいどんな冊子を作ろうとしてたのよ……」
　呆れる2人に、奏は部長の言葉を思い出す。『面白いもんを作るには、時に危険も伴う。虎穴に入らずんば虎子を得ず、って言うやろ？』と。そして偶然の不幸が重なった結果がこれなんです。

「そこで、我が勇者部に白羽の矢が立ったってわけよ！　」
「お、お姉ちゃん、まさか……」
「そうよ！そのまさかよ！　」
「今回はアタシ達勇者部が、新聞部の代わりに小冊子を発行します！　」
　風先輩と共にポーズを決めながら、依頼内容を発表する。
「わー！凄いですね！　」
「はぁ……つかの間の平和だったわね……」
「しかも時間が無いわよ！土日の間に記事を作って、週明けの月曜日には印刷所に持って行かないといけないの」
「それはいくらなんでも無茶では……奏ちゃんがいるとはいえ、記事作成の引き継ぎも時間がかかりますし……」
「大丈夫、そこら辺は抜かりないよ。部長副部長、そして新聞部部員から許可を貰って、『勇者部特集号』にしてもいいみたいだから」
「ゆ、勇者部特集号……？　」
「つまり、全ページ勇者部にまつわる記事にしていいってことよ！　」
　その発表で一同から感嘆の声が上がる中、リンちゃんが『多大な犠牲を出した割には、記事は何でもいいのね』と呟いた気がしたが、無視した。なにせ時間が無いのだから。

勇者部特集号という事もあり、パソコンが扱える東郷さんが編集長。そして各々担当記事を決めて作成、最終的に東郷さんに文字起こしをして貰う流れとなった。

奏は編集長補佐として全体のサポートをしつつ、亡き部員達の記事を纏め、作成。発行するにもページ数が足りない様なら、これを付け加える予定だ。

「私と樹ちゃんが、勇者部の日々の活動記録だね」

「頑張ります！」

「じゃあアタシは、うどん屋食べ比べ記事ね！」

「どうせなら、新聞っぽく4コマ漫画とかもあった方がいいわね。私は記事よりもそっちを描くわ」

「では、私は社説ならぬ勇者部部説を」

「よーし！それじゃ、勇者部……と奏！執筆開始！」

号令と共に、各々作業に移る。奏は調べ物もあるため図書室と部室を行き来したりしていたのだが、勇者部の様子を見る限り順調そうに見えた。

しばらくして、飲み物などの差し入れを持って部室へと戻ると、ちょうどユウちゃんの「出来た！」と声が聞こえた。

「お疲れ様でーす。飲み物買ってきましたよー」

「あら、ありがとう奏。気が利くわねー」

「手伝って貰ってる立場ですから。それで、ユウちゃんの声が聞こえたけど出来たの？」
「うん！よかったら、かなちゃんと樹ちゃん、２人共読んでみてくれる？　」
「いいよー」
「分かりました。えーっと……」
【○??月×日?。今日は勇者部のみんなで側溝のどぶサライに行きました。手強い相手でした。でも頑張ってキレイに出来ました！】
……夏休みの日記かな？
「どう？どう？うまく書けてる？　」
「……とっても、友奈さんらしいと思います」
「うん、ユウちゃんらしいと思うよ」
頭を撫でながら褒めると、嬉しそうに笑う。
「ホント？へへー。樹ちゃんも書けた？　」
「はい、一応……」
「どれどれ？　」
【○月×日。勇者部は老人ホームへ行きました。お婆さんやお爺さんとお手玉をして遊んだり、肩たたきをしてあげたり。】

「ふむふむ」
「ほうほう」
流石いっちゃん。年下ながらしっかり書けてるなー。
【そして、1番お婆さん達を喜ばさせたのは、我が姉にして勇者部部長、犬吠埼風でした。】
「ふむ？　」
「んん？　」
【お散歩へ一緒に出掛けたり、いつまでもお婆さん達の話相手を笑顔を絶やさず続けたり……お姉ちゃんはやっぱりスゴイ！】
……風先輩に対する……日記かな？
「ど、どうですか？　」
「う、うん……樹ちゃんが、風先輩のことを大好きって気持ちが凄く伝わってくるよ！　」
「うん、きっと風先輩もこれを読んだら喜ぶと思うよ」
「本当ですか？えへへ、良かったです！　」
いっちゃんにも頭を撫でながら褒めると、こちらも嬉しそうにしている。無理矢理誤魔化してる感はあるが、2人らしいと言えば2人らしい。ここは触れずに他の人の様子

を確認しよう。
「風先輩、記事の進捗はいかがですか？」
　ちょうど東郷さんと風先輩が話しており、進捗確認をしていたようだ。
「ふふん！とっくに出来てるわよ！」
「流石です」
「早いですね！よっ、流石女子力王！」
「ふふーん！次の記事もじゃんじゃん書くから、出来たのからパソコンに取り込んじゃっていいわよ」
「あっ、でもその前に、内容を確認させて貰ってもいいですか？」
「あっ、そうね。風先輩、よろしいですか？」
「ん？もちろんいいわよ？」
「では、失礼します」
【うん、うまいうどんだ。いかにもうどんってうどんだ。もぐもぐ。このうどん屋は正解だった。】
　……うどんの……感想日記、なのかな？
【ほほう、このお店は釜揚げうどんオンリーか。いい匂いだ、タマナライ！うおォン！アタシはまるで人間火力発電所だ！】

もはや訳が分からないよ、風先輩。
「どうよ！アタシの渾身のうどん記事！　」
「え、ええ……素敵だと思います。とっても……」
「あはは……あっ、東郷さんは勇者部部説だったっけ？どれくらい書けたの？　」
乾いた笑いをしながら、話題を無理矢理変える。この記事がじゃんじゃん増えるらしいが、話題ごと逃げよう。
「ええ、とりあえず下書きだけだけど」
「見せて見せて！　」
「はい、どうぞ」
「「どれどれ……」」
【勇者部は自らの活動に一縷の希望を見た。この戦いが皇国の未来を築く崇高な任務であると自覚し、以て国民の負託に応え……】
……国防だね、うん。ブレないね、相変わらず。
「どうでしょうか。割と自信作なのですが」
「え!?あ、ああ、うん！凄くいいと思うわ！　」
「うん、書いてて楽しかったんだろうなというのが伝わったよ。国防だけど」
「ありがとうございます」

「さ、さて！夏凜の方はどうなってるかなぁ!?行くわよ奏！　」
「は、はーい！　」
　２人で逃げる様にリンちゃんの様子を見に行くと、鼻歌を歌いながら作業していた。
「お、ノリノリね」
「リンちゃんは４コマ漫画だったよね。進捗どう？　」
「ふふん、ちょうど今描き終えたところよ」
「へ～、どれどれ？　」
　リンちゃんの４コマ漫画を読むが、なんというか……こう、画力が……ねえ？
「どうよ？いかにも新聞に載ってる漫画っぽいでしょ？　」
「これが……？　」
「風先輩、しっ！　」
「はっ！い、いいいやなんでもない！う、うん、そうね……とってもアバンギャルド（前衛的）でいいんじゃない？　」
「なによ、褒めたって何も出ないわよ」
「あはは……」
　再び乾いた笑いを浮かべながら、こちらも下手に触れないようにしようと思ったのだった。というか、大丈夫なのかな今回の小冊子。

そして翌日。今日は部室に泊まり込みで作業する事になった。俗に言う修羅場だ。

「新聞部の皆さんは、毎回こんな感じなんでしょうか……」

「まあ新聞部に限らず、締切に追われる人はこんな感じだよ。あとはまあ、早く更新しなきゃ。前回の更新から数ヶ月経ってる。お気に入りが減ってる。下書きが消えた、データが消えた。設定が複雑になった。早く更新しなきゃと締切抜きで追われる人も居るよ……ふふふ……」

「か、かなちゃん？　」

「ふええ、よく体が持ちますね……」

「きっと頭のネジが何本か飛んでるんでしょうね」

リンちゃんの発言に、一瞬だが全員こちらを見てきた。コラコラ失礼だね。頭のネジが外れてるんじゃなくて、ちょっとお転婆なだけだよ。

そうして始まった記事作成2日目。作業してはまかないのうどんを食べて、また作業に戻る。これを繰り返していると、時刻は深夜0時を過ぎた。

眠気に耐えれずに落ちる者、カフェイン中毒を起こし倒れる者。普段から遅くまで起きる事がないようだから、仕方ない事だ。カフェイン取りすぎて倒れたリンちゃんはあれだけど。

「東郷さんも休んだら？　」

「ううん、平気。そう言う奏ちゃんも休んだら？　」
「ボクも平気だよ。手伝って貰ってる立場だし、慣れてるからね。でも、やっぱり東郷さんも休んだ方がいいよ？　」
「ふふっ、ありがとう奏ちゃん。でも、本当に大丈夫よ」
「むにゃ……ん……かなちゃん……東郷さん？　」
　話をしていると、目を擦りながらユウちゃんが起き上がる。
「あ……ごめん、友奈ちゃん。起こしちゃった？　」
「ううん、ごめん。いつの間にかみんな寝ちゃってたんだ……」
「夕方からずっと根詰めだったから、仕方ないと思うよ」
「そんな、２人共１番働いてるのに。休まなくて平気？　」
「うん……成り行きではあるけど、私が編集長だから」
「そして補佐だからね」
　だから気にしないでと言うと、ユウちゃんはごめんねと謝りながら、パソコンを覗く。
「わっ！凄いよ東郷さん！もう殆ど出来てる！　」
「どれどれ？おおー！本当だ！　」
「でも、記事の配置がどうにも気に入らなくて……」
「レイアウトかー。確かに、何か足りない感じはするね」

「うーん、私には十分凄く見えるけど。もう少しパーッと華やかな飾りを付けたりとか？曖昧な感想でごめんね」
「華やか……花……それよ、友奈ちゃん！　」
ブツブツと呟いてると、何か名案が閃いたのか顔を上げる。その内容を聞き、東郷さんの指示のもと作業を進めるのであった。
それから記事作成は滞りなく進み、この土日で小冊子分の記事も確保出来た。保険で用意していた奏の記事も、次回に使い回せる。無事山場を越えることが出来たのだ。
そして、それから2週間後。勇者部特集号として小冊子が発行された。評判も上々で、完成度たっけぇなおいと新聞部の皆も喜んでいた。
「いやー、まさか押し花でレイアウトするとは。やるなー勇者部」
東郷さんの案。それはユウちゃんの押し花をスキャナで取り込み、それらを使って文字通り記事を華やかにするものだった。それが功を奏したのか、実に勇者部らしい小冊子となった。
「東郷さんから案を聞いた瞬間、『やはり……天才か』と合掌しましたよ」
「そうかそうかー。かなやんもお疲れさん。ウチからも勇者部にお礼持ってくわ。まあ、別件ついでやけど」
「別件？あっ、ちょうど勇者部揃ってますよ」

「ホンマや。かなやん、ちょっと東郷やん呼んできて」
「？はーい」
　部長に言われるがまま東郷さんを呼ぶと、１つ咳払いをしてから本題に入った。
「東郷やんが編集長として小冊子の作成してくれたんやろ？完成度も高かったし、改めてありがとさん」
「いえ、編集長としての責任を果たしただけですから」
「話に聞いてた通り、責任感ある子やなぁ。なら、単刀直入に言わせてもらうわ。東郷やん、よかったら新聞部に入らん？　」
「ええ!?　」
　何故か奏が驚きのあまり声を上げるが、当人の東郷さんも一瞬目を丸くする。だが、すぐに首を横に振って断る。
「申し訳ありません。編集は確かに楽しかったですが……でも、私は勇者部が。友奈ちゃんと一緒にいられる勇者部が好きですから」
「……そっかー。残念やけど仕方ないわ。まっ、気が向いたらいつでもおいで。新聞部は歓迎するで」
「はい、ありがとうございます」
　勇者部の元に戻る姿を見送り、部長は小さくため息を吐く。

「惜しい人材なんやけどなー。あんな顔で言われたら引くしかないかー」
「そうですねー。でも大丈夫ですよ、部長。ボクが！ここに！いる！　」
「せやな。かなやんにはいつも頼りにしとるで」
「おおぅ。冗談でボケたのに、実直な反応をされると照れますね……」
「あはは。可愛いなぁかなやんは」
　からかうように頭を撫でられるが、悪い気はしないのでされるがままにされる。とりあえず、今は小冊子が無事発行されたことを喜ぼう。

１５．料理教室

「皆さんこんにちは。本日の3分クッキングは、定番かつ家庭的っぽい美味しい肉じゃがを作っていこうと思います」
「奏さん、あのー……お願いしといてなんですが、せめてこのＢＧＭは止めませんか？」
エプロン姿のいっちゃんが、困ったように頬を掻く。雰囲気作りにと思ったが、どうやらお気に召さなかったようだ。
大人しくスマホから流れる軽快な音楽を止め、奏もエプロンを身に付けて、２人で台所に立つ。
「それじゃあ、気を取り直してやっていこっか」
「はい、本日はよろしくお願いします！」
やる気満々の返事を貰い、早速料理に取り掛かる。けど、その前に事の発端を説明しよう。そう、あれは先日の出来事だった。
「あっ、奏さん！今少しいいですか？」

「おお、その声は我が後輩いっちゃんじゃないか。大丈夫だけど、どうしたの？」

昼休み。何か面白い事でもないかなーと校内を歩いてると、勇者部唯一の1年生いっちゃんに声をかけられた。

「さりげなく虎にしないでくださいよ～……。聞きたい事があるんですけど、奏さんは一人暮らしなんですよね？」

「そうだよー」

「となると、料理もしてるんですよね？」

「それは、まあ……出来るからしてるけど……」

目を逸らしながら、微妙な返事をする。家事全般は一応出来るが、スーパーやコンビニの弁当の手抜きが多い為、料理はたまにしかしていない。なんだったらパンで済ませる事もある。

「もしかして、いっちゃんも一人暮らししたいとか？大丈夫？主に風先輩が不安で泣かない？」

「ち、違いますよ。その……料理の練習をしたいなって……それで、よければ教えて貰えないかなって……」

「料理の練習かー。それはいいけど、ボクよりも東郷さんや風先輩に教わった方がいいと思うけど？」

「勇者部の皆には内緒で、こっそり練習したいんです。いつもお姉ちゃんに頼ってばかりなので、私も何か出来るようになって、お姉ちゃんの力になりたいって思ったんです」
「い、いっちゃん……！　」
あまりの健気さに、思わず泣きそうになる。風先輩、貴女の妹は滅茶苦茶良い子ですよ。健気ですよ。可愛いですよ。
「よし、分かったよ！この秋月　奏、いっちゃんの為に力になるよ！　」
「あ、ありがとうございます！　」
という事があったのだ。今は手本として、奏が説明しながら肉じゃがを作っている最中だ。
料理部所属のミカを呼ぶ事も考えたが、接点が無い知らない男の人は、いっちゃんが萎縮してしまうと思い除外した。代わりにレシピや初心者にオススメのやつを教えて貰いました。
「とまあ、こんな感じかな。今回は別々で煮たけど、食材によっては調理方法も変わるらしいから」
「おおー……。なんというか、普段からは想像がつかない家庭っぽさを感じますね」
「いっちゃん、それ褒め言葉じゃないよ？　」
奏が作った肉じゃがを味見し、味も問題無しとタッパーに詰めていく。作り置きも出

来るし、カレーとかの他の料理にも応用出来る。
「次はいっちゃんがやってみよっか。ところで、どれくらい料理した事あるの？包丁の扱い方とか大丈夫？」
「それは大丈夫です。私も何度か料理はした事ありますから」
「へー。それじゃあ、扱い方は大丈夫そうだね。一応レシピのメモもあるけど、ボクもサポートするから。あとは怪我しないように気をつけてね」
「はい！よろしくお願いします！」
意気込みも充分。これならすぐに上達するじゃないかな。
そう……そう思っていた時期が、ボクにもありました。なんということでしょう。ボク達の目の前には、紫色の何かが存在しています。
「えっと……ボクがお手洗いに行ってる間に、何の錬成をしたのかな？」
「すいません……もう少し濃い方がお姉ちゃんも好きかな、と……あと隠し味的な事も……」
それだけでこんな事が起こるのか。恐ろしい子……。いやまあ、姉想いでの行動だから責めにくいけど。
「いや、まあ、えっと……ほら！見た目より味だよ味！意外と美味しいってパターンもあるかもしれない――――」

　そう言いながら味見をすると、一瞬意識が飛んだ。次に頭の中に宇宙空間の様な光景が浮かび、思考が止まる。次に真っ白な空間に引きずり込まれ、走馬灯の様なものを見た。
「……でさん！……かな……！　」
　誰かに呼ばれてる気がして、思考がそちらに向かう。無意識に手を伸ばすと、顔の輪郭に触れ、熱を感じる。
「奏さん！しっかりしてください！　」
「……はっ!!　」
　意識が戻り、上体を起こす。気絶したのか、どうやら倒れたらしい。どおりで後頭部が痛い訳だ。いや、それで済んだからよかったけど。
「良かったです……その、大丈夫ですか？　」
「……いっちゃん。一応、念の為、参考がてらに聞くけど、前に料理した時もこんな感じに失敗したの？　」
「……はい」
「よーしいっちゃん。分量と調理法を守っていこうかー？　」
「は、はい！　」
　目を離したら駄目だ。目を離したら、それがボクの最後になる。その確信を得て、２

人は再び料理へと取り掛かった。
それは、テスト勉強や、デメ〇ル戦よりも厳しい戦いだった。調味料の入れ過ぎ、もしくは少な過ぎ。煮込み不足や生焼け。果てには定番のひっくり返しもあった。
「で、出来た……！　」
「や、やりました……！　」
だが、そんな苦難の末に……いっちゃんはやり遂げたのだ。何度失敗を積み重ねただろう。何度（奏が）意識を飛ばしかけただろう。
目の前には変色も何も無い、綺麗に作られた肉じゃが。何度目か分からない味見を、恐る恐るする。
「美味しい……美味しいよう、いっちゃん……」
ちゃんと口の中には肉じゃがの味がし、安堵のあまり泣きそうになる。
「よ、良かったです……」
「これなら問題無く食べれるよ。美味しい美味しい」
何度も味見をして美味しい事を再確認し、いっちゃんの肉じゃがをタッパーに入れる。せっかく上手に作れたのだから、風先輩と食べたらいいと話したからだ。
ちなみに失敗作もタッパーに詰めたが、どうするかは決めていない。カレーに入れればなんとかなるかな……何とかなって欲しいけど……なんとかなる……よね？

意識が飛んだ時の恐怖が蘇り、まるで初めてＧＴロボを見たト○コみたいに全身がゾワッとした。
「どうしたんですか奏さん？　」
「なななな、なんでもないよー？　」
身体だけでなく声までも震え、そそくさと袋に入れて渡す。後片付けも済ませ、今回の料理教室はこれにて閉幕となった。
「お疲れ様。あとは繰り返し練習だね。一応念を押すけど、分量と調理法は守ってやるように。好みの味や家庭の味を出すには、まずレシピ通りの味を身に付けてからだよ」
「は、はい！気をつけます……！　」
「うん。でもまあ、いっちゃんもよく頑張ったね。偉いよ」
頭を撫でながら労いの言葉をかけると、一瞬目を丸くされる。
「今の奏さん、なんだかお姉ちゃんと同じ雰囲気でした」
「んー……そう、かな」
「はい。でも、ありがとうございます。今日はお世話になりました」
「うん。風先輩にもよろしくねー」
いっちゃんを見送ったあと、奏は冷蔵庫を開けて大量のタッパーと改めて向き合う。
本当にどうしようかな……これ。

それからしばらくの間。ミカに押し付けたり、カレーにぶち込んでは消費するを繰り返していた。そんな日々に疲弊していたところ、再びいっちゃんに声をかけられる。

「あの、奏さん。もしよければ、また何か料理を教えてくれませんか？」

その言葉に、奏の脳裏に料理教室の時の記憶が過ぎる。味見をする度に、精神と肉体を激しく消耗する、まさに地獄みたいな瞬間を。

もう教える事は無いだろう。そう高をくくっていた。一刻も早く消費し、記憶から消してしまおうとさえ思っていた。だが、現実は無情であった。

「――――ンンンンンンンン!!」

断るという選択肢が元より除外されている為、奏は某陰陽師みたいな声をあげたのだった。

１６．ステネコ

「あっ！東郷さん、かなちゃん、猫ちゃんだ！　」
「えっ」
「あら、捨て猫……なのかしら？首輪はしているようだけど」
　３人でお出かけしていると、拾ってくださいと書かれた段ボールの中に、猫が寝ていたのを発見する。近くまで行くと目を覚まし、大きな欠伸をしてこちらを見上げてくる。
「可愛いね～。ねえ、このままだも可哀想だし、私達で引き取り手を探してみない？　」
「友奈ちゃんは優しいわね。勿論いいわよ」
「ありがとう、東郷さん！　」
「そうと決まれば、まずは声掛けだけど……なんで奏ちゃんは、遠くの物陰に隠れているの？しかも逆よそれ」
　チョッ○ーみたいな隠れ方をしていた所をツッコミを入れられるが、何も言わず首を横に振る。それに首を傾げられるが、ユウちゃんが苦笑いしながら東郷さんに説明する。

「かなちゃん、動物に避けられてるっぽいの。近付くとすぐに逃げられるから、自分から距離を取ってるんだって」
「それは……難儀な事ね」
「大丈夫、ボクは猫が好きだから問題ないです！　」
「聞いてるこっちが切なくなるわ……」
「でもほら。この子のんびりしてそうだし、意外と逃げないんじゃ――――」
そう言いながら段ボールごと抱えて近寄ってくると、中にいた猫は即座に飛び降りて、東郷さんの所へと逃げていった。
「だ、大丈夫大丈夫。遠くから猫を見つめられているだけでボクはいいんです……」
「切な過ぎて胸が痛いわ……」
「ごめんねかなちゃん……」
不安な出だしではあるが、こうして猫の引き取り手を探す事になった。まずは知り合いから電話をし、誰か飼ってくれないかと聞いてみる。
「という訳でミカ。猫飼わない？　」
『悪い、一応聞いてみたけど駄目っぽい。それより、お前が猫拾えたの？逃げられずに？エイプリルフールはもう過ぎたぞ？　』
「うるさいなぁっ!!逃げられるから、ユウちゃんと東郷さんの手の中に元気で居るよっ

!!　」

　涙目になりながら電話を切り、次会ったらドラゴンスクリューをかける事を誓う。

「こっちは駄目だったよ。かなちゃん達は？　」

「こっちもよ。幸い人通りが多い所に出るし、そこでも声をかけていきましょう。それでも駄目なら、保健所に連絡を入れるって事でいい？　」

「賛成――！　」

　ユウちゃんが同意すると、猫も鳴いて返事をする。

「おおー！この子もいいって返事したよ！　」

「可愛いな～。誰か引き取ってくれるといいんだけど……」

　街中に出て、手当り次第声をかけていく。だが、猫を引き取るという事は、命を預かるという事。すぐに頷いてくれる人はおらず、時間はお昼を回ってしまう。

　猫もお腹が空いたのか、何度か小さく鳴いてくる。ついでにと言わんなばかりに奏とユウちゃんもお腹の音を鳴らす。

「一旦お昼ご飯にしましょう。餌付けするのは良くないけど、この子にも栄養を上げないと」

「あそこの喫茶店とかどう？テラス席なら猫ちゃんも同行可能だよ」

「じゃあそこにしよっか。猫のご飯はボクが買ってくるから、席確保しといてー」

「はーい！　」

嬉々として猫のご飯を買いに行くが、想定外……ではなく、もはや予定調和と言わんばかりの事が起きる。

同席しようとすると猫が逃げ出そうとしたり、チュールで仲良くなろう作戦を実行するも、近付いてはくれたが袋ごとチュールを奪い、ユウちゃんの元へと逃げていったのだ。

ご飯を食べた後は、放心状態で使い物にならなくなった奏をそっとして声掛けを再開する。しかし、引き取り手は見つからず、日が暮れてきた。

これ以上は成果は得られないと判断し、東郷さんは保健所に連絡を入れる。その間、猫を抱えたままのユウちゃんに慰められていた。

「ほ、ほら？お腹が空いて警戒してただけだよ、きっと！　」

「そうかなぁ……？その前から逃げられてた気がするよ……？　」

「だ、大丈夫だよ！ほら、この距離でも逃げようとしないよ！　」

「ぐっすりお眠だからだけど、多分あと少し近付いたら逃げるって、経験上分かってるんだよぉ!!」

「かなちゃ～ん……」

「お待たせ……って、どうしたの２人共？　」

　起こさないように声量を落として嘆いたところで、東郷さんが戻ってきた。
「ナンデモナイヨ。ソレヨリ、ホケンジョカラハナンテ？　」
「奏ちゃんの様子から察したわ……それで、保健所で預かって貰える事になったのだけど、どうやらすぐには無理そうなの」
「ええ!?じゃあ、それまでどうしよう!?　」
「一時的にだけど、誰かに預かって貰うしかないわ。私の家は駄目だし、友奈ちゃんの家も駄目だったわよね？　」
「でも、預ける間だけでも出来ないか相談してみるよ！もし駄目なら、その時にまた考える！　」
「ちょっと待って？何で１人暮らしのボクが選択から除外されてるの？　」
　挙手すると、２人は無言で顔を逸らす。いや分かってるよ？分かってるけどさ？散々ダメージ負ってるよ？でも、諦めたらそこで試合終了だよ？
「確かに、奏ちゃんに預かって貰えるのがいいのだけど……」
「その……大丈夫、かなちゃん？　」
「大丈夫！家に置くだけなら大丈夫だし、なんなら猫用の道具も沢山あるから！　」
　なんでそんな物を持ってるんだ？と聞かれた事があるが、全ては猫とお近付きになる為に用意したものだった。結果？いずれ成功するよ、きっと。

不安しかないと言わんばかりの2人だが、とりあえず奏の家に預ける事となった。念の為ユウちゃん達も家に上がり、猫と遊ぶための玩具等で猫と戯れていた。

猫じゃらしを片手に奏も試してみたが、見向きもされず逃げられたので、大人しく猫のスペースや寝床を用意していた。だ、大丈夫大丈夫……ボクは元気な子です……。

「そろそろ帰らないといけない時間だけど……奏ちゃん、本当に大丈夫なの？　」

「大丈夫だよ。もう何も怖くない――――だって、1人ぼっちじゃないもの」

「それは不安しか感じないよ!?　」

「まあ……猫も疲れたのか大人しくしてるし、なんやかんや用意した玩具で遊んでたし、多分大丈夫だと思うけど……」

1匹で運動出来る物も設置し、それで遊んで疲れたのか、今は眠そうにして寝床で丸まっていた。自分の家に猫が居るというのは初めてである為、避けられる云々を抜いても不安はある。

「でもまあ、せめて元気でいられるようにはするよ。幸い明日明後日と休みだし、保健所の人も来るんでしょ？ならなんとかなるよ」

「そう……でも、何かあったら連絡してね？　」

「すぐに駆けつけるから！かなちゃんもその……無茶しないようね！　」

オブラートに包んで励まそうとしてくれてるのが凄く伝わる。2人を見送ったあと、

改めて猫の様子を見る。大きな欠伸をして、毛づくろいをしていた。
ご飯と水を用意して運ぶが、近付くと猫はそそくさと部屋の隅っこに逃げ、奏が食器を置いて離れると、警戒しながら戻ってくる。
「やっぱり懐かないかぁ……でもまあ、元気そうならいっか」
遠くでご飯を食べてる猫の姿を眺め、その愛らしさに微笑む。……いや、もしかしたら触れられる機会があるかもしれないし、慌てず待とう、うん。
翌日。なんとか親睦を深めようと色々試すが、全て空振りで終わってしまう。唯一近くまで来てくれたのは、おやつのチュールの時のみだ。しかも昨日と同じく器用に奪っていかれた。
「はぁ……前は逃げられるなんて事も無かっただけどなー」
大きくため息を吐き、猫じゃらしを手持ち無沙汰に振りながらソファーでふて寝する。
「最後に触れたのは、ばっちゃんの所にいた猫だったっけ……懐かしいなぁ」
腕で目元を覆い、目を瞑ると昔の事を思い出す。ばっちゃん達と過ごした光景。それは鮮明に頭の中に残っており、ボクにとって大事な、思い出の１つ。
「本当……懐かしいなぁ」
その呟きを最後に、静けさが家に漂う。１人暮らしなので静かなのは珍しくもない

が、感傷的な気持ちになっているせいか、動く気になれない。
しばらくそうしていると、ふと猫じゃらしを持ってる手に違和感を感じる。じっとしていると、急にむず痒くなったり気になったりするやつかなと思って無視に務める。
だが、今度は猫じゃらし伝てに衝撃が伝わり、なんだろうと腕の隙間から視線を向けると、猫が猫じゃらしに向けてパンチをしていたのだった。
「なんだ猫か……猫おっ!? 」
いきなり大声を出したせいで、猫は驚いて離れていった。いやだって、普段から逃げられてるから。気付いたら近くに猫が居て遊んでたら、そりゃあ……驚くでしょ?
上体を起こし、警戒しながらも一定の距離を保ってくる猫を見つめる。もしかしたらと猫じゃらしを突き出し、軽く振りながら猫が届く高さまで下ろす。
すると、猫はゆっくりと歩いてきて、猫じゃらしの前で止まる。遊ぶのかと思ったが、じっと見つめてくるだけで動こうとしない。なんだろうと小首を傾げると、猫はニャーと鳴いたあと、寝床へと戻って行った。
「ええ……」
何がしたかったのか分からず、困惑の声を洩らす。丸まってお昼寝の体勢に入った猫は、こちらを一瞥したあと、もう一度鳴いて瞼を閉じる。
「……もしかして、元気付けようとしてくれてたのかな? 」

それだったらいいなぁと、頬杖を付いて眠りについた猫を眺める。保健所の受け入れ準備が整うまでの世話には不安があったが、これなら多分、大丈夫そうだ。

それから2日間。相変わらず距離が縮まる事もなかった。でも、近付くだけで逃げられる事はなくなり、凄く嬉しかった。流石に触れられる距離は逃げられるけど。

そして、約束の時が来た。ユウちゃんと東郷さんと一緒に、待ち合わせ場所の公園で迎えが来るのを待っていた。

「連絡とか無かったけど、結局大丈夫だったの、かなちゃん？　」

「うん、思ったよりも大丈夫だったよ。猫も大人しかったし。まあ、懐く事は無かったけど。でも遠くから眺めていられるだけでボクは幸せです」

「もはや悟りの域に達したみたいな言い方で、かける言葉が出てこないわ……」

「もはや半ば諦めてる節はあるよ。フフフ……」

生気の無い目で笑っていると、公園にお婆ちゃんが現れた。迎えの人かなと思うが、何かを探すように辺りをキョロキョロしている。

「お婆ちゃん、どうかしたのかな？」

「何か探し物をしている様だし、声をかけま――――」

東郷さんが言い切る前に、既にユウちゃんはお婆ちゃんの元に向かっていた。

「流石友奈ちゃんね。行動が早いわ」

「あっ、そしてお婆ちゃん連れて戻ってきたよ」
「東郷さーん！かなちゃーん！猫ちゃんの飼い主さん、見つかったよー！　」
「え？　」
「え？　」
　詳しく話を聞くと、どうやら猫は捨てられたのではなく、偶然段ボールの中に入っていたらしい。家を抜け出す事はあってもちゃんと戻ってくるらしいのだが、入ってるところを奏達が見つけたというところだ。
　些細なすれ違いで起きてしまった出来事。ちょうど保健所の人も来たので、ユウちゃん達は事情を説明しに行き、奏はお婆ちゃんに猫を受け渡す。
「ありがとうねぇ、お嬢ちゃん。ミケの世話をしてくれて」
「いえいえ。その子も大人しかったから何とかなっただけですよ。猫……ミケも良かったねー。お婆ちゃんの所に帰れて」
　お婆ちゃんの腕の中で大人しくしているミケに声をかけるも、そっぽを向かれる。
「あらあら、この子ったら。ごめんなさいねぇ」
「あはは……だ、大丈夫です。慣れていますので……」
「あらあら。でも、心配いらないよ。優しいお嬢ちゃんなら、きっと懐いてくれる子もいるよ。それじゃあ、わたしはここでお暇させてもらうねぇ」

「あ、ありがとうございます。お婆ちゃんもミケも、お元気で」
そう言ってお婆ちゃんを見送ってると、途中でお婆ちゃんの腕からミケが飛び降りる。まさかの事で２人は驚いていると、ミケはこちらの方へと駆け寄り、奏の前で止まる。
「ど、どうしたの……？　」
じっと見つめてくるミケに、困惑しながらも尋ねる。数秒の沈黙が流れると、ミケは足元まで近寄ってきて、顔を擦りつけてきた。
突然の事でフリーズしていると、ミケはニャーと鳴いたあと、すぐにお婆ちゃんの元へと戻って行った。その様子を見ていたお婆ちゃんは、笑って言った。
「ほらねぇ。懐いてくれる子もいたでしょう？それじゃあ、元気でねぇ」
「――――――はい！お元気で！　」
半泣きになりながらもお婆ちゃん達を見送り、後ろで様子を見ていたであろうユウちゃん達も、良かったねぇと笑っていた。
奏はこの感触と温もりを忘れないよう、そっと足元を触れたのだった。
数日後。もしかしたら他の猫とも触れ合えるのでは？と試みたが、見事玉砕したのは言うまでもなかった。

MELTY BL○○D TYPE ASAHI★

むかーしむかしあるところに。それはそれは明るく元気な少女がいました。
「今日っのごっはんは、かっらあっげ弁っ当〜♪」
スーパーの袋をハヤテ号の籠に入れ、それを駆る元気な少女。珍しく残っていた唐揚げ弁当に、心を踊らせながら帰宅路を走っていました。
少女は公園の道を通ろうとしました。すると、公園の近くの道端に、それはそれは綺麗な青髪ポニテの女性が、どんぶらこっこどんぶらこっこと、這いずる様に流れてきたのです。

「ちょっと待ちなさいっ！どういう状況よそれ!?　」
「どうしたのリンちゃん？　」
「どうしたの、じゃないわよ！どこに持っていきたいのよその話!?　」
「実際這いずって来たんだから仕方ないよ」
「這いずって来ないわよ普通っ!?　」
「いや、確かにあれにはボクもビックリしたよ。警察か救急車を呼ぶか迷ったもん」

「そりゃそうでしょ……え、なに？その話、ついていかなきゃいけないの？」
「――――ついてこれるか？」
「……ちょっと待ちなさない。1回頭の中整理するから」
「スルーされちゃったよー」
「まあまあかなちゃん。それでどうなったの？」

少女は戸惑いながらも、大丈夫ですか？と女性に声をかけました。すると、女性はボソボソと何か喋りました。上手く聞き取れなかったですが、意識はあると安心し、なんて言ったか聞き返しました。
「お、お腹……減った……」
「行き倒れかいっ！」
「お腹減って動けなくなる、分かるよその気持ち」
「前にユウちゃんも大変だったもんねー」

少女は困惑しながらも、空腹で動けなくなったと判断しました。なので、女性を2つに割ると、中から元気な――「割るなーっ!!!」

「――――――（数秒の沈黙）」
「スゥ――――――
割　る　なーーーっ!!!!」
「……少女は言いました。おお、なんて可愛らしい赤ん坊なんだと」
「もういいわよ!そんなべるぜ〇ブみたいな展開、誰もついてこれないわよ！　」
「大丈夫大丈夫。割ってもないし、魔王の赤ん坊もいないよ」
「それで、奏ちゃんは実際どうしたのかしら?」

少女は困惑しながらも、手持ちの唐揚げ弁当を差し出しました。その匂いに気づき、女性は顔を上げてこちらを見てきました。
「えっと、良かったら食べます?　」
「い、いいの!?今の私、お腹の減り方尋常じゃないし!最悪、その手に持ってる唐揚げ弁当の全てを食い漁ってしまう可能性があるけど（ぐぅぅ〜）……はぅ、ごふ」
「全然いいですよ。困ったらお互い様だってばよ！　」
「あ、ありがとう〜！　」
公園のベンチに移動し、弁当を食べてもらいました。その間、少女は自販機で飲み物を買い、女性の元へと戻りました。

「ご馳走様でした！いやー、助かったわ！　」
「もう食べ終わった!?　」
　風先輩の如く平らげた事に驚きながらも、女性にお茶を差し出し、隣に座りました。
少女はお腹に何か入れておこうと買ったコンポタを飲み、一息つきました。
「本当にありがとう、お嬢ちゃん！あのまま行き倒れになるかと思ったわ」
「既に行き倒れになってたと思うんですけど……えっと」
「朝緋よ。お嬢ちゃんは？　」
「秋月　奏――――探偵さ」
「あっ、確かコ○ンの台詞ね。平成のシャーロック・ホームズになれなかったやつ」
「やめて朝緋さん！新○のライフはもう0よ！　」
「年号が変わったのが行けなかったわねー」

「本題に入るかと思ったら、脱線していってるじゃない！　」
「これが意外と盛り上がっちゃったんだよ」
「ツッコミが不在だから、そのまま伸びていったのね」
「それで、その人は何で倒れてたの？　」
「それがねー」

「暇だから少し遠出して買い物しつつお昼も食べようと思ったけど、電車の中にバッグを忘れてしまい、しかもそれに気づいたのがさっきだから、空腹に見舞われ力が入らず倒れてたと？　」
「そうなの。うっかりしてたとはいえ、危うく死ぬところだったわ。おかげで帰りもどうしたものか」
「うーん……もしかしたら忘れ物センターにバックが届けられてるかもしれませんし、1度駅に戻るのはどうです？　」
「あっ、それもそうね。それじゃあ、早速行こうかしら。お世話になったわね奏ちゃん」
「いえ。せっかくだから、最後まで付き合いますよ。なんか心配なので……」
「そう？なら道中のお話し相手になって貰おうかしら。実はうろ覚えでしか道が分かってないのよ」

「とまあ、色々ありながらもその人を駅まで送ったんだよね」
「天然にも程があるおっちょこちょいね……」
「でもすっごい綺麗な人だったよ。物腰柔らかというか、お淑やかというか、なんか大人のお姉さんって感じだったなー」

「そうなんだー。その人は無事に帰れたの？」
「やっぱり駅にバッグが届けられていたから、無事帰れたっぽいよ」
良かった良かったと話が終わるが、奏は道中の話をしていない。いや、しないでおこうと思ったのだ。
ここからは、ただの記憶の振り返り。道中に朝緋と何があったのか、奏はお茶を飲みながら1人思い出すのだった。

「えっ!?子供がいるんですかっ!?」
お姉さんだと思ってたら、実は1人の母親という事に驚く。いやだって、滅茶苦茶若いんだもん。大学生と勘違いするぐらい若いんだもん。
「そうなの～。これが頼もしくて可愛い息子で。そうね、ちょうど奏ちゃんと同い年ぐらいよ」
「ほへ～。そしてまさかの同い年ですか」

「そうよ～。それにお嫁さんもいるのよ」
「およ、お嫁さんっ!!?既に結婚してるのっ!!?　」
「あっ、ごめんごめん。お嫁さんは言葉のアヤね。でも、もうお嫁さんみたいなものよ。小さい頃から仲良しだし、息子もその子の事が超を越えるぐらい大好きだし。私の予想じゃ秒読みよ秒読み」
「ええ……」
　親バカを遺憾無く発揮している朝緋さんに困惑しながらも、本当に嬉しそうに話している姿に、釣られて笑みを浮かべる。
　実際相手はどうなんだろう?と思うが、振り回されたりして大変そうな姿が想像出来る。でも、この様子じゃ満更でもなさそうな気もしなくもない。
「ところで、奏ちゃんは好きな人とかいないの?　」
「つい、いませんよ!　」
　不意を突くような急な質問に、慌てふためきながら答える。しかし、その反応がいけなかった。朝緋は新しい玩具を見つけた子供のように、目を輝かせていた。
「あら～。可愛い反応ね。ねね?実際の所どうなの?好きとまではいかなくても、気になる子とかいないの?　」
「いませんいませんっ!　」

「じゃあ好みのタイプとかは？優しい人～とか、たくましい人～とか」
「無いです無いですっ！　」
「じゃあじゃあ、理想な人とかは？こんな感じの人がいればいいな～とか」
「無いですって！そういう話はボクにはよく分からないので、この辺にしてくださいっ！　」
「あらあらまあまあ。照れちゃって可愛いわね～」
「からかわらないでください……！　」
恥ずかしさでむくれる奏に、朝緋はごめんごめんと謝る。
「でも、恋は良いわよ～。いつか奏ちゃんにも、素敵な人が現れるといいわね」
「う―……」
人の恋愛話を聞いたり話したりするのは好きだが、縁が無いためか、その手の話題を自分に振られるのはだいぶ……いや、滅茶苦茶気恥しい。
「もうっ。いいから行きますよ」
逃げるように自然と早歩きすると、余所見してたせいで誰かと顔面からぶつかる。
「おうっ、ごめんなさ――」
「……なんだぁ？このチビは」
地味に痛い鼻を抑えながら見上げると、いかつい顔をしたお兄さ……おじさん？どっ

ちだろう、多分おじさんとぶつかちゃったヨ。いや素直にやばいかも。
それにしてもなんだろう、この２人。なーんか似てるキャラをどっかでみた気が……なんだったっけかなぁ。
「兄貴にぶつかるなんて、いい度胸してんなぁ、ガキ」
「あ、いや、そのですね」
「言い訳は結構、この俺様にぶつかった事、後悔させてやるぜ？ガキンチョ」
屈強な大男さんが、こちらに殴りかかってくる。あ、これ……死ぬ……（ジャガー感）
「ちょーっと待った」
「あ？」
「オイタが過ぎるわよ、お兄さん方。こんなに可愛い美少女捕まえて……暴力でもふろうってんなら、私が相手になるけど？」
そこに割って入ったのは、朝緋さん。明らかに重そうな一撃を片手で難なく受け止める姿が目に入る。
「どいとけ、姉ちゃん。それ以上邪魔するなら怪我するぜ？」
「どうぞどうぞ。私は反撃する気一切ないから、お好きにかかってきていいわよ？」
「……後悔するんじゃねえぞ」

大男さんの目つきが変わる。後ろにいた取り巻きみたいなやつもニヤニヤしてるし、あれは、うん、ちょっとやばい……本気で手加減しない気だ。

「あ、朝緋さん!?流石に危な――――」

「大丈夫大丈夫、私、最強だから」

「五○先生っ!? 」

ニヤッと口の端を釣り上げ、そう言った朝緋さん。それが合図かのように、大男は動き出す。

結論から言いますと言葉通り、そのお姉さんは『最強』でした。すごい勢いで殴り掛かってくる大男さんの攻撃を、全部捌き切り、挙げ句の果てには「もっと本気でやって欲しいなぁ～」と煽る始末。頭に血が上った大男さんは取り巻きも呼んで、殴り掛かったものの結果は……。

「ふぁ～、もういい?そろそろ帰りたいんだけど」

「まだ……ぜぇ…ふぅ…やれ、おぇ…」

「兄、き…、もう、む…むりぃです、俺」

意気消沈としているお兄さん方を見つつ、考える。似ていたキャラ……うーん。

「あっ！ 」

「急にどしたの、奏ちゃん?」

「思い出した！ドラゴン〇ールのヤ〇ーとスポポ〇ッチだ！いやー、これでモヤモヤが晴れる……スッキリした～」
「…？あ、あーなるほど分かる分かる。こう、いい感じの小物感とかそっくりよね」
緊張感、そんなものボク達には必要ない！というより、朝緋さんが一緒にいるお陰かもしれない。この人ならなんとかしてくれる、という謎の安心感が出ている。
「…な、なんだ、この女の強さ…化け物じゃねえか…一体何もんだ、あんた」
「あ、兄貴！もしかして、この姐さん…噂の青髪の壊し屋じゃ…!?」
「何その、色んな星に神聖樹の実を植え付けては回ってる軍団のボスの異名っぽいやつ」
初耳なんですけど？と困ったような表情を浮かべる朝緋さん。……朝緋さんはター〇スだった？
「私の名は朝緋、お兄さん達、私と一緒に来る気はないか？」
さっきまで困ってた割には楽しんでるよね、朝緋さん。わざわざ声のトーンまで落として真似てるし。
「四国を気ままにさすらって、つるやのうどんを食べ、可愛い息子の笑顔を見る…こんなに楽しい生活はないぜぇ？」
「いや、普通に遠慮しときます」
「あっそう？じゃあ、まぁ…とりあえず、全力で奏ちゃんに謝ってもらってもいい？（修

羅）」

手をバキバキ鳴らしつつ鬼の形相を向けてくる朝緋さんに対して、何も出来なくなったお兄さん達はボクに対して土下座をした。

なんというか……うん、逆にごめんね、お兄さん達。

「二度と悪さするんじゃないわよー！今度やったら破壊っ！するからねぇ～」

「落ち着いてください、朝緋様」

「ふふん、だんだん私の事わかってきたわね？奏ちゃん」

さてとっ、と腕を伸ばし、もう大丈夫と安心させるように、微笑みかけてくる。

「一悶着あったけど、行きましょうか。駅はこっちよね？　」

「えっ、あ、はい！じゃあ、行きましょう！　」

どこか懐かしさを感じながら、朝緋さんと駅に向かう。何故そう感じたのかは分からなかったが、思い出すように理由が分かった。

１人暮らしをしてからあまり見なくなった、両親の笑顔。その笑顔と、同じ感じだったのだ。落ち着くような、安心するような、そんな感じの微笑み。

駅に向かう最中、色んな話をした。朝緋さんの息子さんの事、そのお嫁さん……もといお相手さんの話。趣味の話や、何でそんなに強いのか、何か武道でもやってたのか。

良かったら軽く稽古でもしてみる？と言われて公園に寄り道したが、馬鹿みたいに強

い。すぐにぶん投げられて地面に転がっていた。しかも、奏が怪我をしないように投げられていたらしい。凄い（小並感）

区切りをついた所で、砂埃や汚れを落として再び駅に向かう。今日は何を買いに来ていたのか。好きな物、苦手な物はなにか……ちょくちょく奏の好みの話に戻されるが、その度に反応する奏を見て、朝緋さんは楽しそうに笑っていた。

そして、話題として勿論――――

「へ～勇者部、そこには奏ちゃんのお友達がいるの？」

「はい、皆とっても良い子達で……一緒にいていつも楽しいし、心が……その、ほっこりするというか」

「……」

さっきまで横に歩いていた筈の朝緋さんが立ち止まった。気になって振り返ると、その目はボクの顔をジッと見つめている。

「…朝緋さん？」

「あ、ごめんね。奏ちゃんがあんまりにも良い顔してるもんだから見惚れちゃって」

「おっと、その手は食いませんよ。ボクを照れさせようとしたってそうは」

その言葉に、朝緋さんは首を振る。

「ううん、からかってないよ。これは本心。勇者部の子達の事を話してる時の奏ちゃん、

本当に良い顔してるわ」

こちらに歩み寄り、優しく頭を撫でてくれる。その姿は、まるで……。

「貴女はそのまま真っ直ぐ生きなさい。いつまでも、その気持ちを、その顔を…忘れないように。それを忘れない限り、きっと貴女は今まで以上に素敵な女の子になるから」

どこまでも優しい表情を浮かべながら、朝緋さんは微笑んだ。

どうしてか目頭が熱くなるのを感じたが、それを打ち消すように、釣られて微笑んだ。

「ありゃ、いつの間にか駅まで着いちゃってたわね」

「本当だ……それじゃあ、ここでお別れですね」

「そうね、うん！ありがと、奏ちゃん！すっごい楽しかったわ！　」

「ボクもですよ、朝緋さん。こちらこそありがとうございました」

いいのいいの、とニコニコ笑いながら言う朝緋さん。直後、何かを思い出したかのようにバッグを開け始めた。

「忘れ物があったわ、ごめんね奏ちゃん……コホン……この中に三つのポ○モンボールがあるじゃろう？」

「え、急なポケ○ンネタ!?　」

「この中には私の電話番号と私の電話番号、そして私の電話番号が入っておる。さぁ、どれか一つを選ぶが良い」

「実質一択!?!? 」

良い話で終わりそうだったのにやっぱり終わらなかった！流石、朝緋さんと言った所か……。

「もし困った事とかあったらいつでも私に電話してね。例え、火の中でも水の中でも、一万と二千年先の未来であっても、駆けつけるからさ」

そう言って、青髪を靡かせながら朝緋さんはまた笑った。ちょっと変だけど、やっぱり優しい良い人……ん？

あれ？なんで、急に体操し始めて……あれ？

「朝緋さん？あの、電車出ちゃったけど…？」

「あー、知ってる知ってる。だってあえて乗らなかったのもの」

「……それは、なぜ？」

「いやー、なんか体あったまっちゃてるし走って帰ろうかなって！」

「えっ!?走るって!?え？」

「よーし！行っちゃうわよー！」

戸惑っている奏を他所に、朝緋さんはマジで走り出した。しかも、電車といい勝負してる。

「…あはは、本当にすごい人だったな」

それが、ボクと鷹月　朝緋さんの最初の出会い。ちょっと不思議で変だけど、どこか優しくて温かい…とっても強い女性との出会いのお話だったとさ。

「終わりよければ全て良しってね。また、会いましょう。秋月　奏ちゃん」

17．讃州中学の風来坊

これは、新聞部の記事作成の為に、奏が取材をして回っている時の様子だ。

兵頭　真人（まひと）編

『再三聞いてきましたが、なぜ放課後になると服を脱ぐのですか？』
「再三答えただろう。お前は今まで食べてきたパンの枚数を覚えているのか？」
『（今回も諦めた）では、兵藤さんは人に女の子のタイプを聞きますが、兵藤さん自身はどんなタイプが好みですか？』
「決まっているだろう。身長とケツがデカい女がタイプだ」
『その答えは完全にアウトでは？』
「そんな事は俺は知らん。ああそうだ。タイプといえば、望月の女のタイプを聞きそびれたな。運動会以降探しているのだが、こちらを見かけるとすぐに何処かに行ってしまう。たくっ、照れ屋さんめ」
『頑張ってください。最後に、なぜサラダ油を常備しているのですか？』

「俺はガン○ムマイスター兵藤だ。常に備えておくのは当然だろう？　」

三好　夏凜編

『学校には馴染めましたか？　』

「アンタにしては真面目な質問ね……だいぶ時間も経つし、流石に慣れてきたわよ」

『この学校に来て、印象に残っている事とかはありますか？　』

「そうね……パッと思い付いたのは、やっぱり勇者部の活動ね。最初はなんでこんな事やってるんだと思ったけど、まあ……悪くないかなって……ちょっ、なに笑ってんのよ！　」

『勇者部のメンバーについてどう思っていますか？　』

「はっきり言って手に負えないわね。毎日振り回されるわ個性が強過ぎるわ。そんなんで今までやってこれたのが不思議なくらいね。

……でも、良いヤツらよ。みんな」

美術部部長

「あらあら？私に取材？いいわよ～」

『美術部はコンクールでの受賞が多く成績を残されてますが、普段からどのような活動をしているのですか?』
「んー、顧問の人から好きにしていいって言われてるし、その日みんながやりたい事をやってるわよ。人間、やりたい事をやる時が、1番力を発揮出来るから」
『それで、たまに贋作レベルの作品を作り上げてるんですね。ちなみに、その被害にあった生徒の報告がちまちまと出ているのですが、その点については? 』
「注意書きを無視する人間って、ろくな目に合わないわよね~。ちゃんと周りを見なきゃ。あっ、なんなら今から部室の中に来る?ちょうどお化け屋敷状態にしてるのよ」

犬吠埼　風編

「んで、アタシの所にも取材って訳ね。いいわよ、じゃんじゃん聞きなさない! 」
『勇者部として活動して2年が経ちますが、その中で苦労した事、大変だった事はなんですか? 』
「そうねー。なんなら今が1番大へ――――っじゃなかった。勇者部を立ち上げたばかりの頃ね。人手も少ないし、やれる事にも限界があったからね。それに、他の人からしたら勇者部って聞いても、どんな活動なのか分からないってのもあるから、広報や宣伝方

面も苦労したわ」
『何事も最初が肝心であり、大変という事ですね。今ではメンバーは5人に増えましたが、勇者部の活動にも幅が広がった感じですか？　』
「お陰様でね。友奈は体を動かす仕事を任せられるし、子供達からも人気だし。東郷はハイスペックだから、勇者部のあらゆる面を補ってくれる。正直、東郷の加入は大きいわね。
　夏凛もなんやかんや言いながら周りを良く見てフォローしてくれているわ。アタシと張り合ってくるだけあるわね。
　そして！我が愛しのマイ　エンジェル!!樹は気弱そうで目が離せないけど、というか離すつもりないけど！頑張り屋さんで可愛いのなんの！この前も――――』
「では、そんな勇者部の事について一言ください」
『ちょっ、まだ話の途中よ！まあいいけど。コホン。
　勇者部は世のため人のための活動を、勇んでしているわ。傍から見ればボランティアだけど、こういう小さな事を積み上げていくのが大事。何か困ってる事があるなら、勇者部に来なさい。以上！　」

新聞部部長編

「んで、なんでかなやんは身内にも取材をしてるんや？　」
『意外性を突きたくて。それで、新聞部は『虎穴に入らずんば虎子を得ず』の精神で活動していますが、面白い記事やネタを得るためでしょうか？　』
「せやなー。と言っても、別にそれは部のモットーやない。ウチも部員も、勿論かなやんも。自ら面白いと思ったものに飛び込んで行ってるだけや。その結果、様々な話やネタが集まって、面白おかしい記事が出来てるって訳や」
『なるほど。言われてみれば、みんな喜々として行動していますね。しかし、それで危険な目にあったりしたのでは？　』
「それほ教訓して、次に生かせばええんや。よく言うやろ？ただ失敗を認めて、次の糧にすればいい。それが大人の特権だって」
『それは仮面の人の台詞ですし、ボク達は中学生ですよ。ちなみに、今までで1番危ない目にあったのは？　』
『それはタブーや。黙秘権を行使するで』

「という訳で、記事名は『讃州中学の風来坊』としました」
「相変わらず意味が分からんっすね。内容は面白いっすけど」

「おーいかなやん？ウチの最後の質問は添削しとくでー？　」
「あっはっはっ、何言ってるんですか部長。もう既に手遅れですよー？　」
「あっはっはっ、そっかー。よしかなやん。そこに座りなー？　」
「虎穴に入らずんば虎子を得ず。しかして得るものと同時に失うものもあり、という事ですね。にっげろー」
　こんな感じで、今月も新聞部の月刊紙は無事発行されました。この後、リンちゃんにも追われたのは内緒の話だ。

18．いのるもの★

「入院っ!?　」

ある日、ユウちゃん、東郷さん、リンちゃんが欠席していた。先生から話を聞くと、どうやら風先輩やいっちゃん、勇者部のメンバー全員が休んでおり、今は検査のため入院しているらしい。

突然の事で驚いたが、前に言われたお役目が関係しているとすぐに気付いた。

放課後になり、すぐさま学校から飛び出して病院へと向かう。お役目については説明出来ないと以前に言われたが、そんなの関係無い。友達が大変な事になってるなら、お見舞いに馳せ参じねば無作法というもの。

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ！友達の見舞いに参れとボクを呼ぶ！聞け、勇者部よ!!ボクは正義の戦士！秋月　奏っ!!　」

「病院内だから静かにしなさい！　」

「夏凜ちゃんも、ツッコミの声量を落とした方がいいわよ」

「あっ、かなちゃんだ！」

お見舞いの品々を持って談話室に現れたら、２年生組が集まっていた。
「まあまあ。あっ、これお見舞いの品だよー」
「ありがたいけど、お見舞いの品でお菓子やらジュースってのはどうなの？　」
「果物や花にしようかなとも悩んだんだけど、手軽の物がいいかなって。それより……みんな大丈夫なの？　」
入院の理由は聞かないが、せめて何事も無い事を願いたい。だが、答える前に３人の表情が一瞬強ばった。その時点で、何かがあったのは分かった。
「大丈夫だよ！私達は見ての通り、元気ピンピンだよっ！　」
「風は左目。樹は声が出せないようだけど、疲れから来てるようだから、すぐに治るって言ってたわ」
「私は検査で長い時間がかかるようだけど、問題ないわ」
だが、すぐに何事もなかったかのように、ユウちゃんは力こぶを作って明るく笑う。２人も気を使ってくれてるようで、それに寂しさと、自分の無力さを感じる。
何も出来ないと理解していても、その気持ちは拭いきれるものじゃなかった。
「そっか。なら、あとで２人にも顔を見せに行くよ！　」
だが、笑ってそう答える。今ボクに出来る事は、悔しい事に何もない。祈る事しか出来ない、ちっぽけな人間だから。

それでも、それすらも止めたら、本当に何も出来なくなるから。
「入院って言っても、検査だからそんなに長くないんだっけ？　」
「うん！明後日には退院出来るよ」
「よかった。それじゃあ、時間も時間だし、風先輩といっちゃんの所にも行ってくるよ。明日もまた来るね」
「別に無理して来なくてもいいわよ、たくっ」
「今日は来てくれてありがとう、奏ちゃん。またね」
「帰り気をつけてねー！またねー！　」
手を振りながらまた明日と言い、風先輩といっちゃんが居るであろう病室へと向かう。
2人にも大丈夫かと聞いたが、風先輩に至っては通常運転だった。むしろ眼帯でノリノリだったし。
いっちゃんは声が出せないため身振り手振りだったが、流石に不便だから、何かいい案がないか考えておこう。

「あれ？もしかして、秋月　奏ちゃん？　」
「？はい、そうですけど」
　翌日。今日もお見舞いに来ていた所、看護婦さんに呼び止められる。どうやら奏の事を知ってるようだが、こちらは看護婦さんの顔に見覚えがない。
「やっぱり。久しぶりね……って言っても、覚えてないか。前に貴女が入院した時の担当をしていた鈴木よ」
　看護婦さんの言葉に、目を丸くする。確かに1度だけ入院した事があるが、その時の事はあまり覚えていない。
「そう、ですか。その節はお世話になりました。でも、ごめんなさい。その……あまり覚えてなくて」
「いいのよ。あの時は貴女も大変だったし、覚えてないのも無理もないわ。それより、今は貴女が元気そうでよかったわ」
「だいぶ経ちましたし、今はユウちゃん達や……友達がいるおかけですよ。１人じゃ、あのまま押し潰れていたと思うので」
「そう……でも本当に良かったわ。退院する時も暗かったから、ずっと心配してたの

よ。いい友達に恵まれたのね」
「はい。大事な……大事な友達です」
微笑みながら答えると、鈴木さんは安堵の表情を浮かべて良かったと笑う。
「でーも。あまり病院内で騒がないようにね？他の人から注意されてるわよ？大声で叫ぶ女の子が来てるって」
「あっ、それはその……ごめんなさい。気をつけます」
「よろしい。それじゃあ、私も仕事に戻りますか。元気でね、秋月ちゃん」
「はい、ありがとうございました」
鈴木さんの背中を見送り、奏は友達だけじゃなく、いい大人にも恵まれていると実感する。
それと同時に、忘れたくなくて……でも、普段は意識しないようにしていた記憶が頭に過ぎる。その事で、気持ちが暗くなっていくのが分かる。
我に返り、これではいけないと自分の頬を数回叩く。お見舞いに行くのだから、暗い顔をしていては駄目だ。今大変なのは、皆なんだから。
気合いを入れ直し、スケッチブックとペン、お見舞いの品が入った鞄を肩にかけ直し、病室へと向かった。

１９．だからこそ★

ユウちゃん達が退院する前日。退院祝いで何かやろうと模索していますが、連日の猛暑で苦しんでいる少女は誰でしょう?そう、ボクです。ガッデムホット。ゴッドホット。

「うっわ、今週も暑いじゃん……」

週間予報を見て更に億劫になり、物置部屋へ向かう足取りが重くなる。

行く理由としては、祝いといっても特になんもアイディアが思い付かず、物置部屋に行けば何か閃くんじゃないかなと思ったからだ。

ただ、あの部屋は冷房などが行き届いていない為、少し居るだけで汗だくになる。換気と扇風機だけじゃ限界があるのですよ。

「ちょっと行ってくるわ。○の錬金術師、最後の錬成にな！」

自分を鼓舞するために両手を合わせ、物置の扉を開ける。中からは閉じこもった熱気が流れ込み、その先の地獄を無理やり体感させてくる。ファッキンホット。

あまりの暑さに逃げたくなるが、中へと入り物色する。

「あれでもない、これでもない……あ！これいいじゃん！」
数分で汗だくになりながらも、ある物を見つける。これで明日やる事は決まったと思い手に取ると、高温で手が火傷しそうになった。
「アツゥイ!!」被弾ボイス

「さあ！ご唱和ください我の名を！ウル〇ラマン、ゼーット！」
翌日の昼休み。教室で皆とご飯を食べ終えた時に、ある物を机の上に取り出す。
「かなちゃん。それってかき氷機？」
「そう、かき氷機だよ。みんなの退院祝いに何かしようかなーと考えた結果、この地獄みたいな暑さから閃いたの。かき氷パーティしようと！」
「通りでクーラーボックスを持って登校してきた訳ね。また何か企んでるんじゃないかと思ってたけど」
「そうよ、そのまさかよ！東郷さんはまだ入院中だから、東郷さんが戻ってきたらまたや

るよ！　」

　クーラーボックスを開けると、中には大量の氷とシロップが入っている。早朝に先生に頼み、家庭科室の冷凍庫で冷やして貰っていたのだ。

　カップと氷をセットし、ゴリゴリ削って第１陣のかき氷を作り上げる。

「お好みで練乳もあるよ。はいどうぞー」

「わーい！ありがとうー！　」

「いらないって言っても押し付けてくるだろうし、頂くわ」

「モチのロン！さあ、溶ける前に食べよー！　」

　苺のシロップをかけて、３人はかき氷を口に運ぶ。冷たさと甘みが口に広がり、暑さで火照っていた体が冷やされていく。

「つめたーい！シャリシャリしてて美味しいねー！」

「ん……？　」

　ユウちゃんの発言に違和感を感じ、食べる手が止まる。普段なら「あまーい！」と言ってる筈だが、なんというか……いつもと違う感想を口にしている。

　いっちゃんの声や風先輩の左目の事もあり、やっぱり何かあるんじゃないかと聞こうとした瞬間、激しい頭痛に襲われる。

「頭が……痛い……！　」

「一気に食べるから頭が痛くなんのよ。落ち着いて食べれば問題無……いたっ！　」
「アッハッハッハッハッ！リンちゃんも頭痛くなってるー！
　」
「なんでかき氷って、食べると頭痛くなるんだろうね？　」
「理由としては、喉にある三叉神経が刺激されて、脳が冷たさを痛みと勘違いして頭痛を起こす。
　あとは急に冷えるから、一時的に血流量を増やして体を温めようするから、頭につながる血管が膨張して頭痛を起こす。主にこの２つが原因らしいよ」
「ほへー。かなちゃん詳しいね」
「アンタが頭良さそうな発言していると違和感を感じるわね……」
「一応成績上位ですから！ちなみに、対策としてはゆっくり食べる事らしいけど、リンちゃんが証明したように、ゆっくり食べても痛くなる時は痛くなるよ」
「役に立たないわね……」
「まあまあ。それよりも、次もあるよ次もー」
「いただきまーす！　」
「２人共食べるの早っ!?そんなんだから頭が痛くなるのよ！　」
「まあまあ。第２陣のお上がりよ！」

「秋月ちゃーん。良かったら私達も貰ってもいい？」
「俺も俺もー」
　こちらの様子を遠目で見ていたクラスメイトが声をかけてくると、１人。また１人と集まってくる。みんなも暑さにやられているのか、冷たいものが恋しいのだろう。
「よろしい！では『かき氷屋アキヅキ』開店と致しましょう！並ぶがよい皆の衆！　」
　そうして、昼休みはひたすらかき氷を作っては皆に配っていった。「また秋月が何かやってるぞ」という話を聞きつけた他のクラスの人も来た。先生も注意をしつつも、ちゃっかりかき氷を食べていく事もあった。
　氷の在庫も勇者部の分を残して使い切り、かき氷屋アキヅキは閉店となった。けど、東郷さんが戻ってきたら時にまたやる。今度は小豆や抹茶とか、トッピング系でもバリエーションを増やしていこうと決心したのだった。
「って、違う違う。頭痛で聞きそびれだけど、聞きたい事があったんだった。ユウちゃんユウちゃん」
　家庭科室の冷凍庫に氷を入れたタイミングで思い出し、声をかける。
「なに？どうしたの？」
「やっぱり体調とか、その……身体のどこか、まだ悪かったりしてない？　」
「大丈夫だよ！私はいつでも元気いっぱいだよ！　」

「でも、かき氷食べてた時になんか……いつもと様子が変だったし……それに、いっちゃんや風先輩の事もあるから……」
「かなちゃんも鋭いなぁ。でも、２人と違って私は大した事ないよ。ちょっと味が分かんないぐらいだから」
何事も無いように言われた事に、血の気が引き、ひゅっと口から息が漏れる。味が分からないって、それじゃあさっきのは……。
良かれと思ってやった事が裏目に出る、と言うが、今それを痛感している。
「えっと……その、ごめんユウちゃん。余計な事しちゃって……」
自責の念で潰されそうになり、俯きながら謝る。
「ううん、気にしないで。私達のためにしてくれたんだから、嬉しいよ！それに、ヒンヤリしたおかげで涼しくなったしね！　」
「でも――――」
続きの言葉を言う前に、ユウちゃんに抱き寄せられる。そして優しい声色で、そっと語りかけてくる。
「いつも心配してくれてありがとうね。確かに大変な事になったけど、私は勇者だから。だから大丈夫だよ」
そう言って離れると、今度は両肩に手を乗せ、顔と顔が向き合う。

「それに、かなちゃんには『おかえり』って言って貰えてる気がするんだ。今日みたいに、楽しい事を用意して待ってくれているんだって。だから、頑張れるんだよ」
「ユウちゃん……」
　昔から変わらない、太陽のような笑顔。その笑顔に、温かさに、何度も救われてきた。だからこそ――
「相変わらず、ユウちゃんは優しいなぁ……」
　目の前に居ても聞こえない程、小さくそう呟く。
「え？何か言った？　」
「ううん、なんでもない。ありがとうね、ユウちゃん」
　だからこそ――――。
「？そっか。じゃあ、そろそろ戻ろっか！あっ、まだ気にしてるんだったら、次は食感が楽しいやつがいいかなー。何かある？　」
「そうだねー。ポップロックキャンディとかかな？口の中に入れるとパチパチするんだよね」
「おおー！アレってそういう名前だったんだね。それは楽しみかも」
「任せて！東郷さんが戻ってきた時に、またやろっか！　」
　だからこそ――――無理しないでほしい。幸せでいてほしいんだ。大事な、大切な、友

達だから。